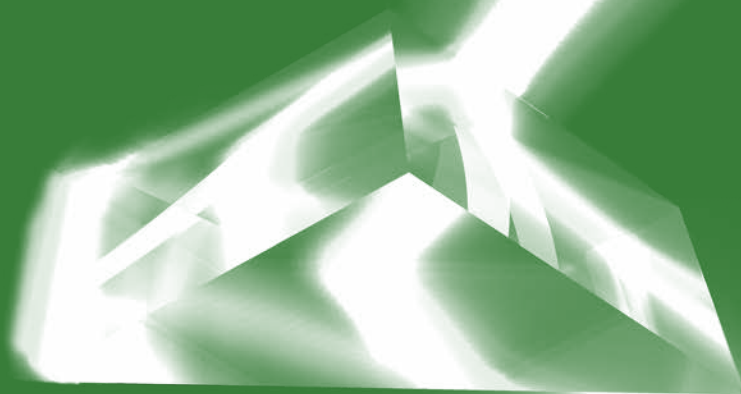


これからの時代に求められる 資質・能力の育成

—— 学びの質や深まりを重視したPDCAサイクルを通して ——



平成28年2月
東京都多摩教育事務所

目次

基本的な考え方

I 研究の背景	1
II 研究主題	1
III 研究の概要	2

研究の内容

I 子供が「どのような力を身に付けるか」を明確にしたPDCAサイクルの推進	3
II 学びの質や深まりを促すための活動の工夫	4
◆ 研究概要図	6
◆ 事例ページの見方	8

学力向上部会

子供が「どのような力を身に付けるか」を明確にしたPDCAサイクル	10
実践事例一覧	11
◇実践事例◇	
小学校 国語	12
中学校 社会	14
小学校 算数	16
中学校 数学	18
小学校 理科	20
中学校 英語	22

健全育成部会

子供が「どのような力を身に付けるか」を明確にしたPDCAサイクル	24
実践事例一覧	25
◇実践事例◇	
小学校 生活	26
小学校 図画工作	28
小学校 道徳・特別活動	30
中学校 総合的な学習の時間	32
中学校 特別活動	34
中学校 特別活動	36

研究のまとめ

I 四つの効果的な指導の工夫	38
II 本研究とアクティブ・ラーニングとの関連	40

基本的な考え方

I 研究の背景

《子供たちを取り巻く環境》

多様化・複雑化する現代社会は、今後、生産年齢人口の減少、グローバル化の進展や絶え間ない技術革新等による急速な変化が予想される。これからの時代を生きる子供たちには、こうした変化を乗り越え、伝統や文化に立脚し、高い志や意欲をもつ自立した人間として、他者と協働しながら価値の創造に挑み、未来を切り拓く力を身に付けることが求められる。

《子供たちが抱える課題》

一方、我が国の子供たちには、判断の根拠や理由を示しながら自分の考えを述べたり、実験結果を分析して解釈・考察し、説明したりすることなどに課題があると指摘されている。また、自己肯定感や主体的に学習に取り組む態度、社会参画の意識等が国際的に見て相対的に低い状況がある。

《国の動向と今後の学校教育の在り方》

こうした中、平成27年8月、中央教育審議会・教育課程企画特別部会は、次期学習指導要領の改訂に向けた論点を整理し、学校教育において育むべきこれからの時代に求められる資質・能力（以下、「資質・能力」という。）を次の3点にまとめた。

- 何を知っているか、何ができるか（個別の知識・技能）
- 知っていること・できることをどう使うか（思考力・判断力・表現力等）
- どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか（学びに向かう力、人間性等）

今後、各学校においては、子供が「何を知っているか」だけではなく、「知っていることを使ってどのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか」という視点から、教育活動に取り組む必要がある。

II 研究主題

これからの時代に求められる資質・能力の育成

— 学びの質や深まりを重視したPDCAサイクルを通して —

《現行学習指導要領の成果と課題》

これまで学校では、現行学習指導要領の「生きる力」の育成という理念の下、「確かな学力」をバランスよく育むことを目指し、言語活動及び体験活動を重視してきた。この成果の一端は、近年改善傾向にある国内外の学力調査の結果に表れている。

しかし、現行学習指導要領は、全体として各教科等においてそれぞれ教えるべき内容に関する記述を中心とした構成になっていることから、授業づくりの認識が、子供が「何を知っているか」にとどまり、子供が「どのように学ぶか」にまで発展しづらい傾向が散見されている。

《多摩地区の現状と課題》

このような中、多摩地区の各学校においては、様々な取組が推進されている。

今年度、多摩教育事務所が訪問した学校における校内研究の代表的なテーマは、図1のとおりである。これらは、「資質・能力」のうち、主に「思考力・判断力・表現力等」と「学びに向かう力、人間性等」に整理される

ことが分かる。このことから、多摩地区においては、これら二つの「資質・能力」の育成に重点的に取り組む必要があり、その育成のためには、子供が主体的に学習に取り組む「学びの質」や、このような学びを通して子供が力を身に付けたり、身に付けた力を活用したり、新たな課題を見いだしたりする「学びの深まり」を重視した授業づくりを推進することが重要であると考えた。

《研究の方向性》

そこで本研究では、「資質・能力」の育成を図るためには、①子供が「どのような力を身に付けるか」を明確にしたPDCAサイクルを推進すること、②子供の学び方に着目し、学びの質や深まりを促すための活動を工夫すること、の2点が重要であると考え、本研究主題の下、事例開発を行うこととした。

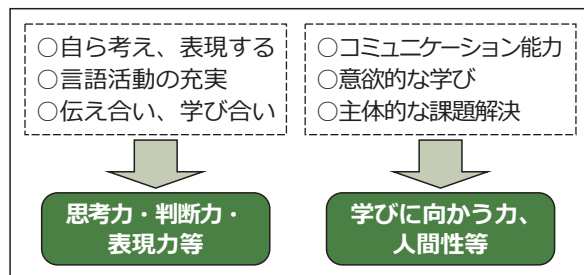


図1 多摩地区における代表的な校内研究のテーマ

Ⅲ 研究の概要

1 研究の視点

本研究では主に、次の二つの視点で研究に取り組むこととした。

視点1 子供が「どのような力を身に付けるか」を明確にしたPDCAサイクルの推進

これまで多くの学校では、教師が「何をどのように教えるか」という視点から授業改善が行われてきた。「資質・能力」の育成を図るためには、各教科等を通して育成する力を見据え、子供が「どのような力を身に付けるか」を明確にして授業を計画・実践することが重要となる。

そこで、本研究では、子供が「どのような力を身に付けるか」を明確にしたPDCAサイクルを通して、授業づくりの在り方を検証することとした。

視点2 学びの質や深まりを促すための活動の工夫

子供が主体的に学習に取り組む「学びの質」や、このような学びを通して子供が力を身に付けたり、身に付けた力を活用したり、新たな課題を見いだしたりする「学びの深まり」は、子供が「どのように学ぶか」、つまり「学び方」と密接な関わりがある。

そこで、本研究では、子供の学びの場であるPDCAサイクルの「Do」を重視し、学びの質や深まりを促すための活動の工夫について、開発・検証することとした。

2 研究の体制

本研究が目指す二つの「資質・能力」を踏まえて「学力向上部会」「健全育成部会」を設定した。

「学力向上部会」では、各教科を通して、主に「思考力・判断力・表現力等」の育成を図る事例を、「健全育成部会」では、道徳、特別活動、総合的な学習の時間などを中心に、主に「学びに向かう力、人間性等」の育成を図る事例を、それぞれ開発し、検証することとした（図2）。

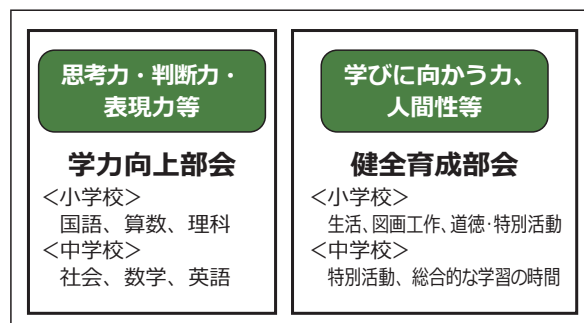


図2 研究の体制

研究の内容

I 子供が「どのような力を身に付けるか」を明確にしたPDCAサイクルの推進

本研究では、子供が「どのような力を身に付けるか」を明確にしたPDCAサイクルを、次のように位置付け、事例開発及び検証を行った（図3）。

- P**lan・・・子供が「どのような力を身に付けるか」
- D**o・・・子供が「どのように学ぶか」
- C**heck・・・子供が「Planで設定した力を身に付けたか」
- A**ction・・・子供が更に力を身に付けるために「どのように学び、深め、広げていくか」

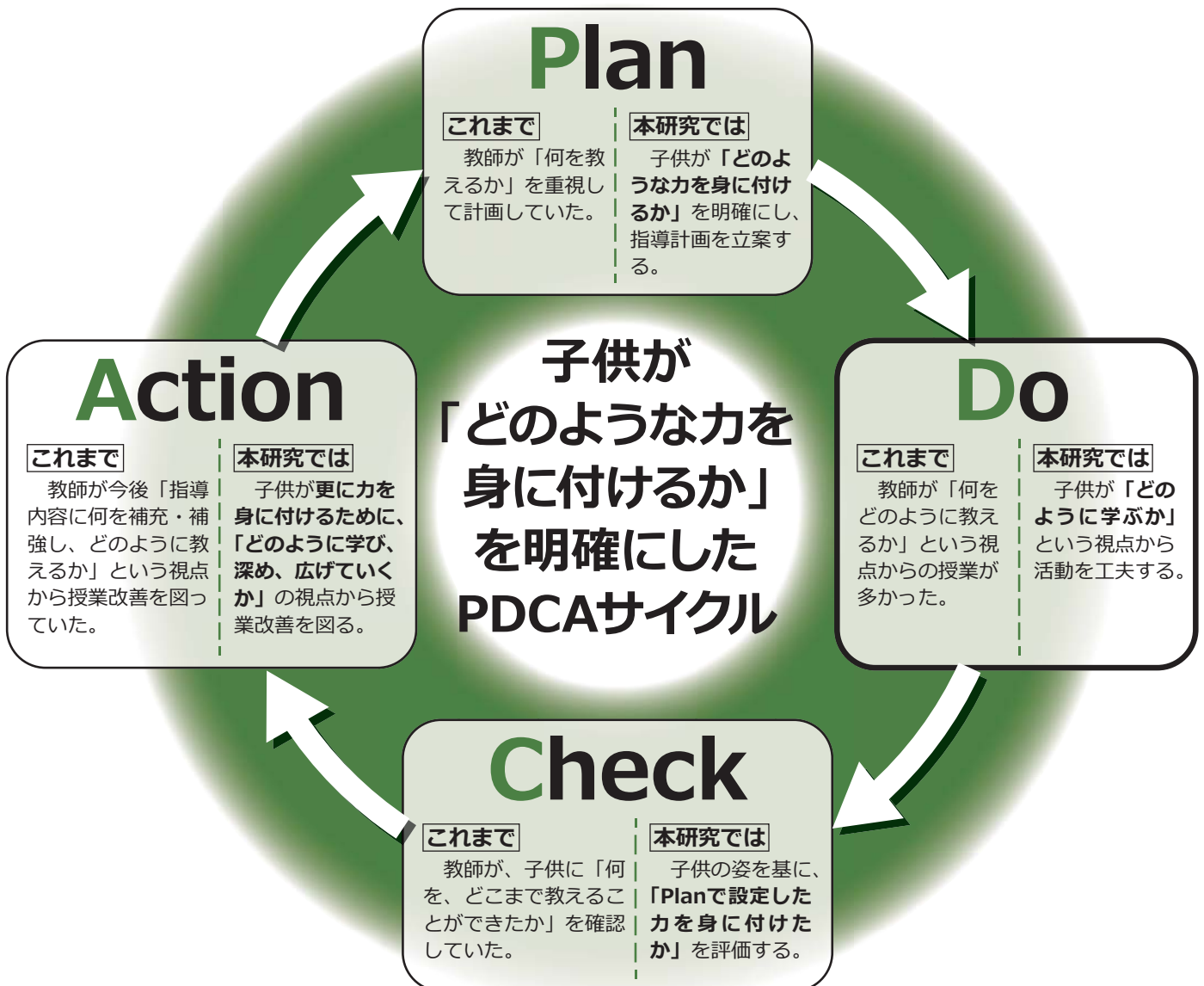


図3 子供が「どのような力を身に付けるか」を明確にしたPDCAサイクル

Ⅱ 学びの質や深まりを促すための活動の工夫

1 活動の定義

各学校におけるこれまでの取組の成果や、今後目指される学びの在り方を踏まえ、子供一人一人が力を身に付けるための活動として、「言語活動」「体験活動」及び「協働的な活動」の三つに整理し、次のように定義した。

言語活動

教科等固有の思考力・判断力・表現力等を身に付けるための、読む、書く、話す、聞く活動

体験活動

教科等で身に付ける力につながる気付きや実感が促されたり、知識・技能の獲得及び資質・能力の高まりを自覚したりするための、体験を伴う活動

協働的な活動

教科等で身に付ける力を総合的に育むために、複数人での対話を通して、協力して一つの方向性を見いだしたり、問題の発見や解決に向かったりする活動

2 「資質・能力」を構成する要素の定義

各部会において育成を目指す二つの「資質・能力」について、構成する要素をそれぞれ三つに整理し、定義した。

思考力・判断力・表現力等を構成する要素

(知っていること・できることをどう使うか)

要素1

問題を発見・解決する、
新しいアイデアを生み出す

要素2

物事を多様な観点から考察する

要素3

自らの学習状況を
客観的に捉えて処理する

学力向上部会

学びに向かう力、人間性等を構成する要素

(どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか)

要素4

自分とよりよく関わる

要素5

他者とよりよく関わる

要素6

社会とよりよく関わる

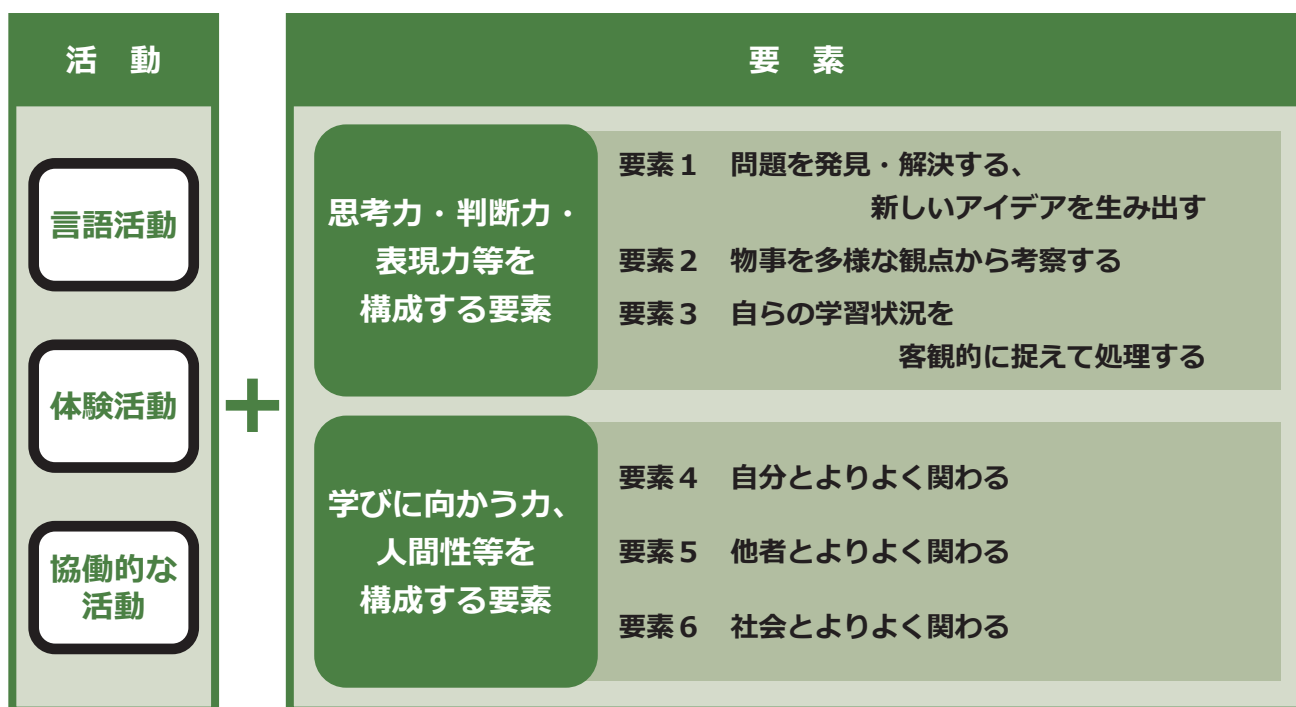
健全育成部会

3 学びの質や深まりを促すための活動の工夫

学びの質や深まりを促すためには、活動を設定するだけでなく、活動に工夫を加える必要があると考えた。

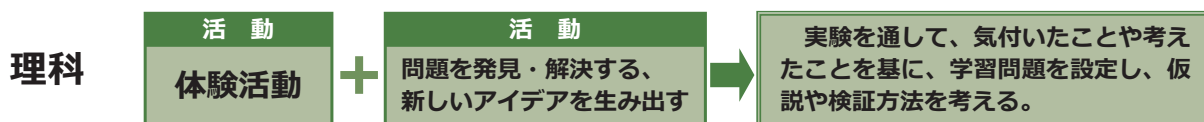
まず、力を育成するために重要となる活動に、目指す「資質・能力」を構成する要素から一つ選んで組み合わせる活動の工夫を行うこととした。このことにより、活動の目的が明確になり、子供が「活動を通して『どのような力を身に付けるか』『何のための活動か』」を意識して、主体的に活動に取り組むことができるようになり、学びの質が高まると考えた。

また、活動の目的を明確にするだけでなく、自分の考えをもち、伝え合い、再び考える場面や、学んだことを活用できたことを振り返ったり、さらにどのように活用するかを考えたりする場面を設定することにより、学びが深まっていくと考えた。

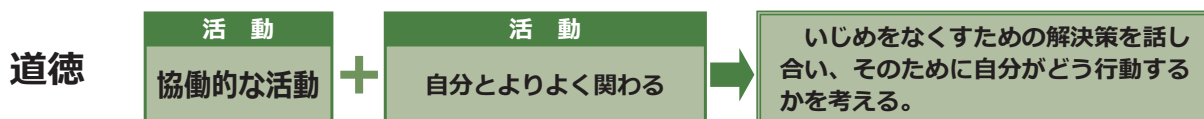


<活動と要素の組み合わせ方>

例えば、学力向上部会の事例「理科（小6）」では、単元で身に付ける力を「電気の性質や働きについて推論する力」と設定し、「活動」に「要素」を次のように組み合わせた。



また、健全育成部会の事例「道徳の時間（小4）」では、単元で身に付ける力を「いじめをなくすために行動しようとする態度」と設定し、「活動」に「要素」を次のように組み合わせた。



◆ 研究概要図

これからの時代に求められる資質・

子供たちを取り巻く環境

- ◆ 生産年齢人口の減少
- ◆ グローバル化、技術革新等による社会の急速な変化

これからの時代に求

個別の知識・技能	思考力・判断力・
何を知っているか、 何ができるか	知っていること・ をどう使うか

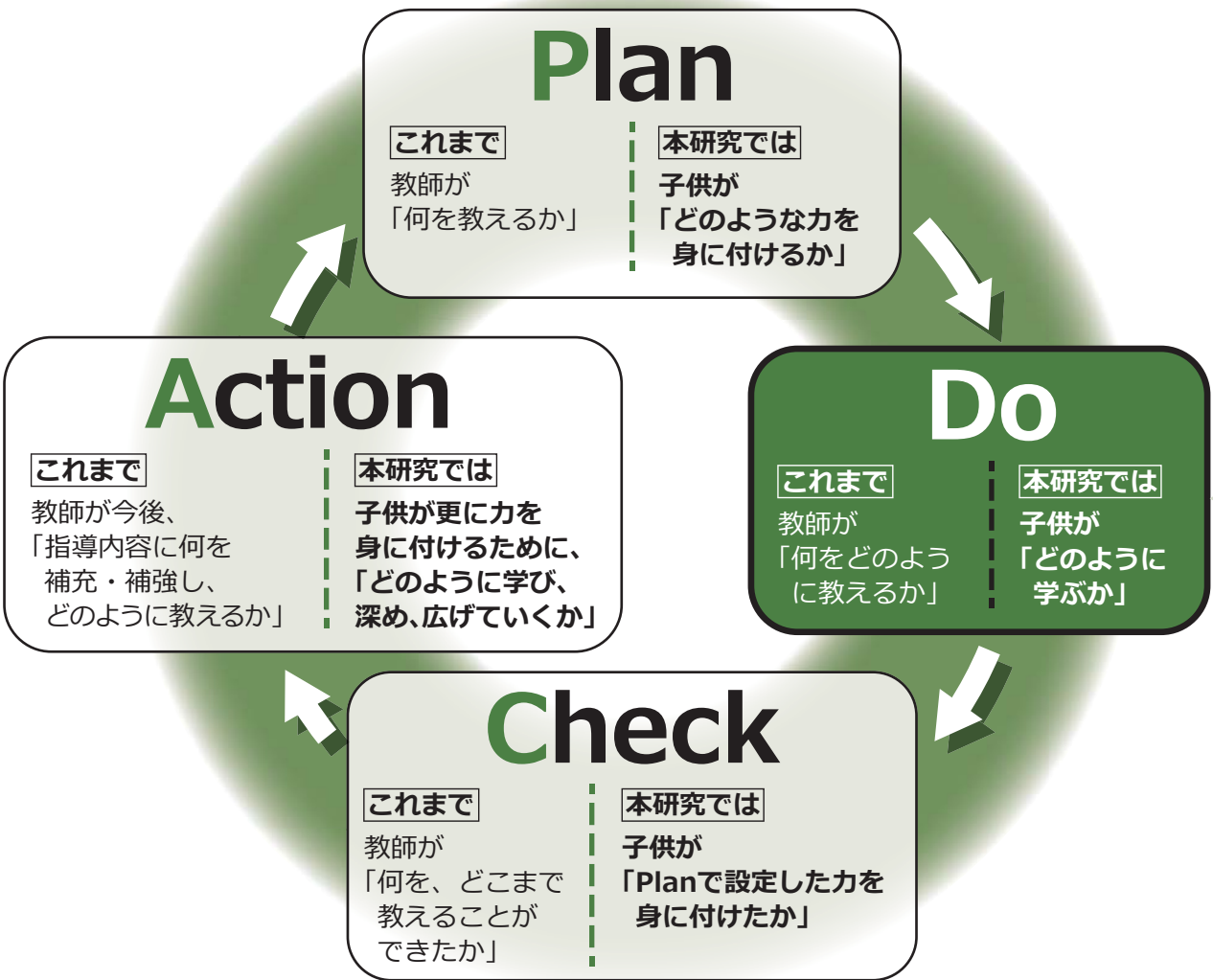
「何を知っているか、何ができるか」だけではなく、「知っていること・でき

学びの質や深まりを重

ポイント1

子供が「どのような力を身に付けるか」を明確にしたPDCAサイクルの推進

教師が「何を教えるか」を中心とした従前の授業改善のPDCAサイクルから、子供が「どのように学び、どのような力を身に付けるか」を明確にしたPDCAサイクルに改善し、授業づくりの在り方を検証した。



能力の育成 —学びの質や深まりを重視したPDCAサイクルを通して—

められる資質・能力

表現力等
できること

学びに向かう力、人間性等
どのように社会・世界と関わり、
よりよい人生を送るか

ることを使って「社会・世界と関わり、よりよい人生を送る」ことが重要

子供たちが抱える課題

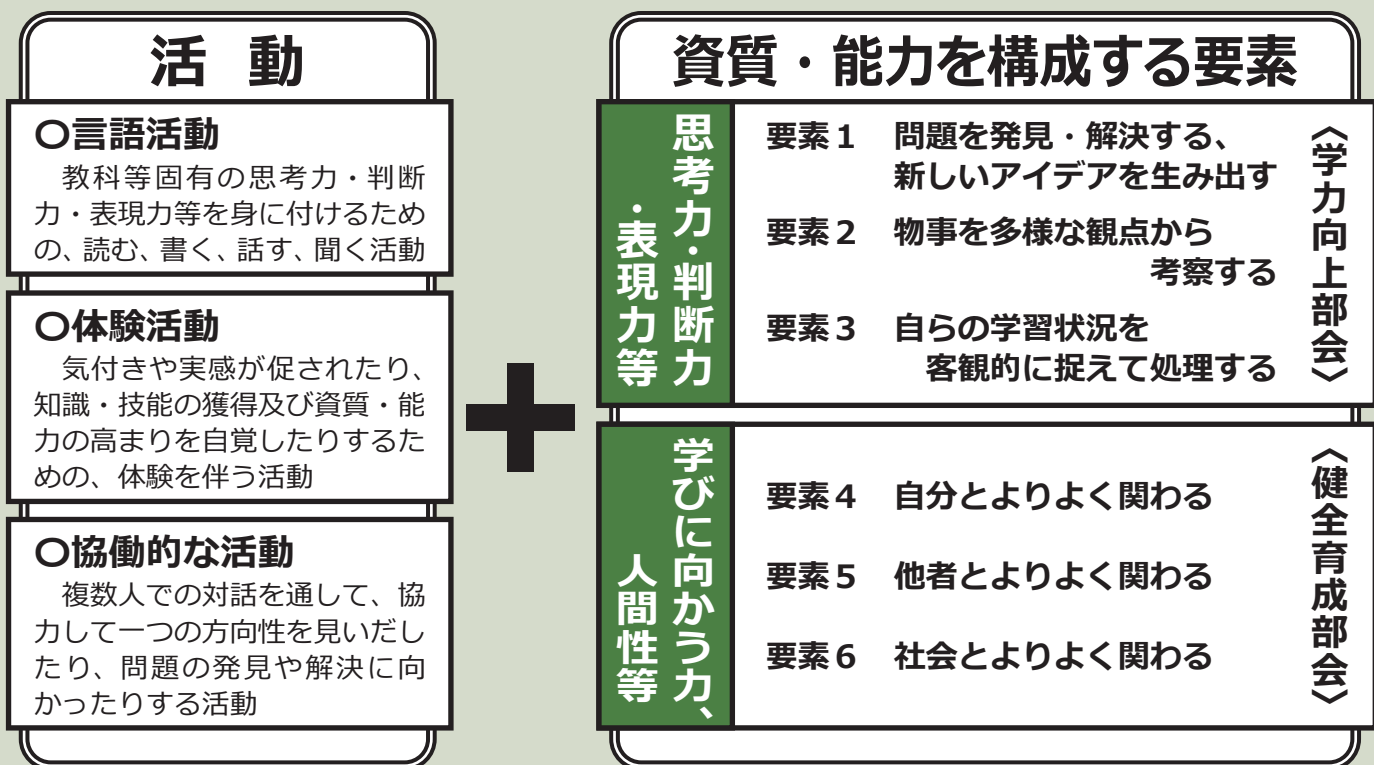
- ◆ 判断の根拠や理由を示しながら自分の考えを述べたり、実験結果を分析して解釈・考察し、説明したりする力が十分ではない。
- ◆ 自己肯定感や主体的に学習に取り組む態度、社会参画の意識等が高くはない。

視したPDCAサイクル

ポイント2

学びの質や深まりを促すための活動の工夫

子供が主体的に学習に取り組む「学びの質」や、力を身に付けたり、活用したり、新たな課題を見いだしたりする「学びの深まり」を促すため、「活動」に「要素」を組み合わせる活動の工夫を開発・検証した。



「単元で身に付ける力」を踏まえて、活動と要素から一つずつ選び、組み合わせる。

例) 理科(小6)では、児童が単元で身に付ける力を「電気の性質や働きについて推論する力」と設定し、次のように「体験活動」に「要素1」を組み合わせた。



◆ 事例ページの見方

単元を通して身に付ける力

学力向上部会は、主に「思考力・判断力・表現力等」、健全育成部会は主に「学びに向かう力、人間性等」と関連を図ります。

これまでと本研究では

これまでの指導における課題と、本研究での視点を示しています。特に、**本研究では**には、これまでの実態を踏まえた解決の視点を示しています。

指導計画の背景色

単元で身に付ける力のために、重視した時間を表しています。
また、この時間は「4 本時」との関連を示しています。

小学校第2学年 生活

1 単元名「おもてなし名人になろう」

2 単元を通して身に付ける力

**「おもてなし」の心を持ち、
他者と進んで交流しようとする態度**

3 指導計画（5時間扱い）

第1時
＜「おもてなし」に関心をもつ＞
家族への「ありがとうの会」を開くという目的を知り、「おもてなし」について知っていることを話し合う。

第2時【本時】
＜「おもてなし名人」から学ぶ＞
茶道体験を通して、もてなしの仕方を学び、もてなされる気持ちを共有することで「おもてなし」の意味を考える。

第3・4時
＜家族に「おもてなし」をする＞
第3時 家族をもてなすためにどうしたらよいかを話し合い、「ありがとうの会」の計画を立てる。
第4時【本時】 「ありがとうの会」を開き、家族をもてなす。

第5時
＜学習の振り返り＞
学習したことを振り返り、「おもてなし」の心をどのような場面で生かしていきたいか話し合う。

これまで

体験活動が目的となり、体験活動を振り返ったり、学んだことを次の活動に生かしたりすることが十分ではなかった。

本研究では

体験活動を通して学んだことを振り返る言語活動を学んだことを生かす活動を設定した。

4 本時（第2～4時）

【本時で身に付ける力】 「おもてなし」の意味を理解し、進んで交流しようとする態度

重視した学習活動

活動に要素を組み合わせた際、特に子供が課題解決に向けて主体的な学びが実現した活動です。
事例によっては、複数の時間にまたがるものもあります。

学習過程	学習活動	具体的な手だて	評価規準（評価方法）
導入	○ 本時のめあてを把握する。	『「ありがとうの会」に向けて、『おもてなし』を体験し、考える』という学習の目的を確認する。	
第2時 展開	「おもてなし」について考えよう。		【身近な環境や自分についての気付き】 言葉や表情、しぐさなど、多様な伝え方があることに気付いている。 (行動観察、ワークシート)
	○ 茶道の講師から、「お茶の心」について説明を受ける。	見たり、聞いたり、感じたりするポイントを確認する。 (名人の姿勢、動き、言葉遣い等)	
	○ 茶道の講師からもてなしを受ける。 1	もてなしを受けたときの気持ちや気付き、疑問について伝え合うことを確認する。 お茶碗を回す理由や丁寧な所作について話し合わせる。	
○ 茶道体験を振り返り、もてなしを受けた感想や疑問を伝え合う。 2			
まとめ	○ 「おもてなし」の意味を考え、自分の言葉で説明する。	話し合ったことを基に考えさせる。	
第3時 展開	「ありがとうの会」でかぞくをもてなそう。		【活動や体験についての思考・表現】 体験を基に感謝の気持ちの伝え方を考え、計画を立てている。 (行動観察、ワークシート)
	○ 「ありがとうの会」に向けて計画・準備をする。	家族に喜んでもらうという視点で計画を立てさせる。	
第4時 展開	○ 「ありがとうの会」を開く。「おもてなし」について学んだことを生かして、家族をもてなす。 3		【生活への関心・意欲・態度】 相手の気持ちを考え、表情やしぐさ、態度などで気持ちを表そうとしている。 (行動観察、発言)
		茶道体験を生かして、家族のために心を込めてもてなすことができるように支援する。	

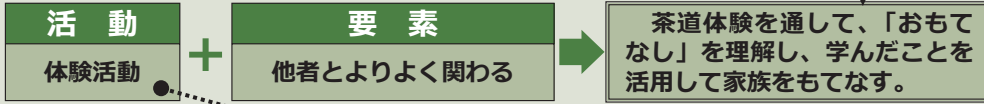
重視した子供の学び

重視した学習活動（●の番号）について、具体的な学習活動、子供の学びの姿を説明しています。

学びの質や深まりを促すための活動

活動に要素を組み合わせ、活動の目的を明確にし、子供の学びの質や深まりを促すための活動を示しています。

【本単元で最も重視した〈活動+要素〉を踏まえた学びの流れ】



1 「おもてなし」を受ける。 (体験活動)



茶道の講師からもてなしを受ける活動

講師がお茶を点てる動き、点てたお茶を美しく運ぶ姿勢、一人一人の前にひざまずき差し出す際の表情などを児童は片時も目を離さず見守った。動作の一つ一つに「おもてなし」の心が込められていることを、児童は実際に見て感じ取った。

2 茶道体験を振り返る。 (学びを振り返るための言語活動)



「おもてなし」について話し合う活動

「嬉しい気持ちになった。」
「動きがとても丁寧だった。」
と、もてなされる立場に立って気付いたことや感想を伝え合った。
次に、「お茶を出す時に、茶碗を回すのはなぜだろう。」という教師の問い掛けから、所作の理由やもてなす立場の心構えを考え、「おもてなし」とは相手に喜んでもらうためにすることと気付くとともに、「自分もやってみたい。」と意欲をもった。

3 「おもてなし」をする。 (体験活動)


自分が点てたお茶を丁寧に運び差し出した。そして、相手の目を見て、両手をついてしっかりお辞儀をした。
自分のもてなしによって家族が喜んでくれる姿を見て、「おもてなし」の意味を再確認した。



家族をもてなす活動

「おいしくなあれ。」とつぶやきながら、家の人に喜んでもらえるように心を込めてお茶を点てた。

重視した活動

重視した活動の場面を、 で示しています。

重視した活動を支える活動

重視した活動の事前又は事後において設定した活動を、() 内に表しています。

例えば、生活科では、体験活動の事後に学びを振り返る言語活動を設定し、次の体験活動に生かしました。

子供の姿

重視した活動における子供の姿を吹き出しで示しています。

まとめ

これまでと本研究ではを踏まえ、単元づくりの際に、大切にしたいポイントを示しています。
構成は、「課題」「本事例における課題を解決する視点」「今後、指導に求められること」で構成されています。

5 単元を通じた児童の変容

- ◇ 事前のアンケートでは、『「おもてなし」とはどのようなことか』の問いに対し、「お菓子や物をあげること」と答える児童がほとんどであった。しかし、事後のアンケートでは、「相手を喜ばせること」「相手の気持ちを考えること」と回答する児童が多数を占めた。「おもてなし」とは相手を思う気持ちからの行為であることを理解し、自分の言葉で表現することができた。
- ◇ もてなす体験では、「家の人を喜ばせたい。」という気持ちで計画を立て、実行した。丁寧な所作でお菓子やお茶を運んだり、両手をついてお辞儀をしたりするなど、「おもてなし」の意味について学んだことを生かして活動する姿が見られた。家族が喜ぶ姿を見て、「おもてなし」の意味を再確認し、もてなすことの喜びを感じることができた。

6 まとめ

体験活動については、活動すること自体が主な目的となり、活動を通して学んだことを振り返ったり、学んだことを生かしたりすることが必ずしも十分ではない、という課題が指摘されている。
本事例では、実際にもてなしを受ける体験活動を行い、体験活動後に気付きや疑問を話し合う言語活動を取り入れることで「おもてなし」の意味について考え理解し、自分の言葉で表現することができた。そして、学んだことを活用する場面を設定した。家族をもてなす体験活動を通して「おもてなし」の意味の理解を深め、もてなす喜びや交流する楽しさを実感し、他者と関わることへの意欲を高めた。
今後は、体験活動を行うだけでなく、言語活動を取り入れて学びを価値付け、さらに学びを生かす活動を設定し、児童の主体的な活動につなげていくことが大切である。

学力向上部会

子供が「どのような力を身に付けるか」を明確にしたPDCAサイクル

P 子供が「どのような力を身に付けるか」(Plan)

「資質・能力」の中から主に「知っていること・できることをどう使うか」に重点を置き、「思考力・判断力・表現力等」の育成を目指す六つの事例を開発した。

事例を開発するに当たり、「単元で身に付ける力」を位置付ける際に、「思考力・判断力・表現力等」との関連をもたせ、指導計画を立案した。

学びの質や深まりを促すための活動の工夫

D 子供が「どのように学ぶか」(Do)

学びの質や深まりを促すため、活動（言語活動、体験活動、協働的な活動のうちの一つ）に、「思考力・判断力・表現力等」を構成する次の三つの要素から一つを選んで組み合わせた。

【要素1】 問題を発見・解決する、新しいアイデアを生み出す

【要素2】 物事を多様な観点から考察する

【要素3】 自らの学習状況を客観的に捉えて処理する

例) 小学校第5学年 算数「分数のたし算・ひき算」

これまで グループでの話し合い活動や全体での発表は行われてきたが、提示された多様な考え方を児童が十分に比較・検討しないまま、教師がまとめてしまう、といった課題が散見された。

本研究では 単元で身に付ける力を「異分母の分数の加法及び減法の仕方を考え、活用する力」と設定し、「協働的な活動」に要素2「物事を多様な観点から考察する」を組み合わせ、「他者の考え方から自分の考え方との共通点や相違点を見付け、課題解決に向けてよりよい考えを見いだす」活動を設定した。

期待される効果 児童が「話し合いを通して様々な考え方に触れ、複数の考え方を比較して算数のよさを見いだす」という目的を明確にもって主体的に活動に取り組む「学びの質」と、解決の方法を活用してそのよさを実感することによる「学びの深まり」の実現を目指した。

C 子供が「Planで設定した力を身に付けたか」(Check)

子供の姿を基に評価するだけでなく、子供自身が学習を振り返り、自己評価する場面を設定した。振り返りの視点として次の2点を示し、学習の感想に終わることのないようにした。

(1) 分かったことは何か、何ができるようになったか。

(2) 学んだことを、次の学習にどのように生かしていくか。

このことにより、身に付けた力を活用して次時の学習に取り組む流れをつくり、単元を通じた「思考力・判断力・表現力等」の育成を図ることとした。

A 授業改善 (Action)

C (check) の結果を踏まえて、子供が更に力を身に付けるために「どのように学び、深め、広げていくか」という視点で授業改善を行うこととした。

具体的には、身に付ける力の育成が十分図られなかった場合は、活動への要素の組み合わせ方を修正するなど、単元を通して見直しを行うこととした。

実践事例一覧

教科等	内 容 等	事例頁
国 語 小学校 第3学年	<ul style="list-style-type: none"> ◎ 単元名 わたしたちの学校のよさを調べ、しょうかい文を書こう ◎ 単元で身に付ける力 相手や目的に応じ、理由や事例を挙げて紹介文を書く力 ◎ 活動と要素 「言語活動」 + 「自らの学習状況を客観的に捉えて処理する」 ⇒ 自分が書いた紹介文のアドバイスしてほしい視点を決め、友達とアドバイスし合い、よりよい文章に書き直す。 <p>【内容】 次年度の新生の保護者に対して、学校のよさを調べ、どのような学校か紹介文を書く。</p>	12 ・ 13 ページ
社 会 中学校 第1学年	<ul style="list-style-type: none"> ◎ 単元名 世界各地の人々の生活と環境 ◎ 単元で身に付ける力 世界各地の人々の生活や環境の多様性を理解する力 ◎ 活動と要素 「協働的な活動」 + 「物事を多様な観点から考察する」 ⇒ 人々の生活や環境について分担して調べたことを、関連付けて統合し、考察する。 <p>【内容】 三都市における生活や環境の多様性の学びを生かして、オリンピック・パラリンピックに来日する人への「おもてなしプラン」を作成する。</p>	14 ・ 15 ページ
算 数 小学校 第5学年	<ul style="list-style-type: none"> ◎ 単元名 分数のたし算とひき算 ◎ 単元で身に付ける力 異分母の分数の加法及び減法の計算の仕方を考え、活用する力 ◎ 活動と要素 「協働的な活動」 + 「物事を多様な観点から考察する」 ⇒ 他者の考え方から自分の考え方との共通点や相違点を見付け、課題解決に向けてよりよい考えを見いだす。 <p>【内容】 異なる分母の分数について、数直線や図などを用いて分母の大きさを確かめ、その考えを基に、たし算・ひき算の計算の仕方を考える。</p>	16 ・ 17 ページ
数 学 中学校 第3学年	<ul style="list-style-type: none"> ◎ 単元名 二次方程式 ◎ 単元で身に付ける力 二次方程式を具体的な場面で活用する力 ◎ 活動と要素 「協働的な活動」 + 「物事を多様な観点から考察する」 ⇒ 他者との対話を通して、課題解決に向けた考え方や方法について、複数の視点から考える。 <p>【内容】 具体的な場面の中の数量やその関係を文字を用いた式で表し、それを基にしてつくった二次方程式を解く。</p>	18 ・ 19 ページ
理 科 小学校 第6学年	<ul style="list-style-type: none"> ◎ 単元名 電気の利用 ◎ 単元で身に付ける力 電気の性質や働きについて推論する力 ◎ 活動と要素 「体験活動」 + 「問題を発見・解決する、新しいアイデアを生み出す」 ⇒ 実験を通して、気付いたことや考えたことを基に、学習問題を設定し、仮説や検証方法を考える。 <p>【内容】 電気の利用について興味・関心をもって追究する活動を通して、電気の性質や働きについて考える。</p>	20 ・ 21 ページ
英 語 中学校 第2学年	<ul style="list-style-type: none"> ◎ 単元名 助動詞 (should、must、have to、may) ◎ 単元で身に付ける力 助動詞を用いて、相手に伝えたい内容を適切に表現する力 ◎ 活動と要素 「協働的な活動」 + 「問題を発見・解決する、新しいアイデアを生み出す」 ⇒ 海外からの転入生に対するよりよいアドバイスを、生徒同士の学び合いを通して考える。 <p>【内容】 助動詞を用いて、海外からの転入生に対して、学校生活についてのアドバイスを作成する。</p>	22 ・ 23 ページ

小学校第3学年 国語

1 単元名「わたしたちの学校のよさを調べ、しょうかい文を書こう」

2 単元を通して身に付ける力

相手や目的に応じ、理由や事例を挙げて紹介文を書く力

3 指導計画（11時間扱い）

第1～3時 <課題設定> 新1年生の保護者に、学校のよさを伝えるために、紹介したい内容、題材を決める。	第4～6時 <取材> 読んでもらう相手や目的に応じて、書く上で必要な情報を調べる。	第7・8時 <構成・記述> 調べたことや感じたことなどが明確に伝わるように、文の構成を考えて下書きを書く。	第9～11時 <推敲・清書> 第9時 各自で間違いを正したり、よりよい文章に書き直したりする。 第10時【本時】 読んでもらう相手や目的を再確認し、よりよい文章にするために、友達とアドバイスし合い、友達の意見を参考にしながら、推敲する。 第11時 推敲した文章を清書する。また、下書きと推敲後の文章を比べてよりよい文章になったことを振り返る。
------------------------------------------------------------------	--------------------------------------------------------	--------------------------------------------------------------------	------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

これまで

自分が書いた紹介文について、字や言葉の使い方を修正したり、教師の指導を受けて書き直したりすることが中心であった。

本研究では

自分が書いた紹介文の内容についての課題を明確にした上で、友達とアドバイスし合いながら紹介文を書き直した。

4 本時（第10時）

【本時で身に付ける力】 相手や目的に応じて、よりよい表現に書き直すことができる。

学習過程	学習活動	具体的な手だて	評価規準（評価方法）
導入	○ 教師のモデル文を基に、推敲の手順を知る。	推敲の視点例を示しながら、全体で手順を確認する。	
展開	○ 学習課題を確認し、自分の紹介文の「推敲の視点」を決める。 ① ○ 互いの紹介文を読み合い、書き手が導入で決めた「推敲の視点」に沿ったアドバイスを付箋に書き、交換する。 ② ○ 友達からのアドバイスを参考に、文章を書き直す。 ③	<推敲の視点例> ・新1年生の保護者に伝わるように書けているか。 ・学校のよさを紹介できているか。 ・自分の思いが書けているか。 アドバイスや質問の例を提示する。 推敲の視点に沿って書けており、どの児童にも参考になるアドバイスを紹介する。 自分の推敲の視点を再度確認するように声を掛ける。また、書き直す際には、赤鉛筆を使用するように指示する。	【書く能力】 書いた文章が読み手に伝わるように、文章を読み直して、よりよい表現に書き直したり、間違いを直したりしている。 （観察、ワークシート）
まとめ	○ 推敲の視点に沿って書き直すことができたかを振り返る。	友達のアドバイスを参考に赤鉛筆で書き直した文章を読み直させ、推敲することの大切さを実感させる。	

【本単元で最も重視した〈活動+要素〉を踏まえた学びの流れ】

活動

言語活動



要素

自らの学習状況を客観的に捉えて処理する



自分が書いた紹介文のアドバイスしてほしい視点を決め、友達とアドバイスし合い、よりよい文章に書き直す。

1 課題を把握する 言語活動



自分の紹介文の推敲の視点を決める活動

自分の紹介文をじっくりと読み直し、アドバイスしてほしい視点を決めて、ワークシートに書き込んだ。

2 読み合い、アドバイスを書く 言語活動



視点に沿って、次のようなアドバイスが見られた。
【視点】保護者に伝わるように書いているか。

インタビューした相手の言葉がどれか、分からなくなってしまうから、「」を入れるといいよ。

【視点】学校のよさを紹介できているか。

PTAのお母さんたちががんばっていることがわかったよ。

【視点】自分の思いが書けているか。

気持ちや感想がとてもよく書けているから、大丈夫だよ。

3 推敲する 言語活動



友達からのアドバイスを参考に、よりよい表現になるよう、赤鉛筆で書き直す活動

友達からのアドバイスを読んで修正したり、部分的に書き直したりする姿が見られた。書き直した後、周りの友達と更に読み合った。



書き手のアドバイスをほしい視点到目して、互いの紹介文を読み、付箋に書く活動

5 単元を通じた児童の変容

- ◇ 「新1年生の保護者に学校のよさを伝えるんだ。」という使命感をもち、主体的に取り組む姿が多く見られた。
- ◇ 書くことを苦手とする児童も、教師のモデル文を基に毎時間、着実に書き進めることができた。
- ◇ 学校のよさについて取材をする段階では、「もっと詳しく伝えたい。」という思いから、休み時間などを利用して、積極的に教職員や上級生にインタビューをする姿が見られた。
- ◇ 本時の学習後、清書の段階においては、自分で何度も読み直ししながら、書き直したり、題名や見出しを工夫したりしながら、紹介文として完成させていく姿が見られた。

6 まとめ

「書くこと」の学習場面においては、「書きたいことが見付からない。」「どう書けばよいかわからない。」といった児童の声がよく聞かれた。苦手意識を自信に変えるためには、相手意識や目的意識をもち、各発達段階で身に付ける「書く力」を、児童一人一人が着実に習得することが重要である。

本事例では、「新1年生の保護者に向けて」「学校のよさを伝える」という課題を設定した。そのことにより、伝える相手がイメージしやすく、題材が身近であることから、児童は相手意識や目的意識を明確にしなが、意欲的に学習に取り組むことができた。

また、文章全体の推敲段階では、自分の課題を明確にした上で、互いにアドバイスし合う活動を取り入れた。これにより、相手や目的に沿った内容であるかどうかという視点をもって自分の文章を見直し、修正することができた。こうした指導の工夫は、第3学年で身に付ける「書く力」の習得につながったといえる。

今後は、国語において身に付けた「書く力」を、他の教科等においても更に積極的に活用し、その定着を図ることが重要である。

中学校第1学年 社会

1 単元名「世界各地の人々の生活と環境」

2 単元を通して身に付ける力

**世界各地の人々の生活や環境の
多様性を理解する力**

これまで

教師が知識を教える講義形式の授業が多かった。また、生徒が各自で調べたことを教師がまとめていた。

本研究では

生徒が各自で調べたことを協働して考察し、課題を解決する活動を行った。

3 指導計画（8時間扱い）

第1時

<学習課題の設定>

世界の人々の生活や環境の多様性について学び、東京オリンピック・パラリンピックでの「おもてなしプラン」を作成するという学習の見通しをもつ。

第2～5時

<暑い地域・寒い地域、乾燥した地域、高地の暮らし>

特色ある自然環境とそれに関係する生活の様子について調べ、理解する。

- ・暑い地域と寒い地域
- ・降水量や標高などの特色がある地域

第6時

<気候帯のまとめ、宗教と生活の関わり>

これまで学習した気候帯について比較し、特徴を理解する。

世界の主な宗教の分布について理解する。

第7・8時【本時】

<学習のまとめ>

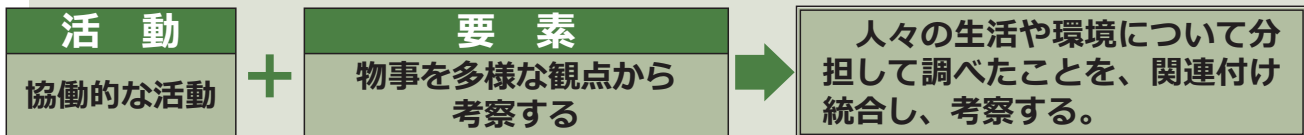
三つの都市の人々の生活や環境について協働して追究・考察し、調べたことを基に各都市から来日する人への「おもてなしプラン」を作成する。

4 本時（第7・8時）

【本時で身に付ける力】 世界各地の人々の生活と環境の多様性を、自然及び社会的条件と関連付けて考察する力

学習過程	学習活動	具体的な手だて	評価規準（評価方法）
第7時	○ 課題を把握する。	課題について、今知っていることを問う。 見通しをもてるように、学習の進め方について説明する。	
	<p>三つの都市の生活や環境について調べて、「おもてなしプラン」を考えよう。</p> <p>○ 一人一つの観点を担当し、三つの都市について調べる。</p> <p>○ 同じ観点で調べた者同士でグループをつくり、情報を交換する。</p>	<p>観点ごとに資料を準備する。</p> <p>【三つの観点】 気候、食事、宗教</p> <p>【三つの都市】 ブエノスアイレス、バンコク、カイロ</p>	【資料活用の技能】 各種資料から有用な情報を適切に選択し、効果的に表現できる。 (ワークシート)
第8時	<p>○ 異なる観点で調べた者同士でグループをつくり、調べた内容を伝え合う。三つの観点を統合して「おもてなしプラン」を作成する。</p> <p>○ 作成した「おもてなしプラン」をクラス全体で共有する。</p>	<p>前時に分担して調べた三つの観点を踏まえて、協働して考察するよう促す。</p> <p>三つの観点を踏まえているか、各都市の生活や環境に配慮したプランになっているかを確認する視点を示す。</p>	【社会的な思考・判断・表現】 世界各地の人々の生活と環境の多様性を、自然及び社会的条件と関連付けて考察することができる。 (観察、ワークシート)
	○ 学習活動を振り返る。	単元を通して学習したことを振り返るよう、振り返りの視点を示す。	

【本単元で最も重視した〈活動+要素〉を踏まえた学びの流れ】



1 担当する観点で、三つの都市について調べて、情報を交換する 協働的な活動



担当する観点について各自が調べたことを伝え合い、付け加えたり、確かめたりする活動

「この国ではこんな食事をしているらしい。」「8月はこんな服装をしているようだ。」など、調べたことを伝え合うことで、三つの都市の生活や環境についての理解を深めた。

2 「おもてなしプラン」をグループで考え、全体で共有する 協働的な活動



分担して調べた内容を伝え合い、「おもてなしプラン」をグループで考え、全体で共有する活動

グループで「カイロはイスラム教徒が多いから、豚肉料理は出せないね。」など、各都市の生活や環境を踏まえたプランを作成した。
また、各グループの考えを共有することで世界各地の人々の生活が自然及び社会的条件と深く関わっていることを改めて確認した。

3 学習したことを振り返る (自己の考えを深める言語活動)



単元を通して学習したことを振り返る活動

「その国の言葉、気候、食文化、宗教があることを理解することが大切。」といった感想が見られた。また、「他の地域は、どのような特色があるのか。」という新たな問いをもつ生徒もいた。

「おもてなしプラン」の例
ブエノスアイレス バンコク カイロ

	メッシュくん	アムさん	ハサンくん
アドバイスしよう	服装は(同じ・変えず) 【理由】 日本の気温差が14℃だから 前半球 持ち物 涼い服装、半ズボン、ワセリ(水筒)	服装は(同じ・変えて) 【理由】 年中暑く、日本の7、8月とそこまで変わりないから 持ち物 変え履き、いーおー(水筒)	服装は(同じ・変えて) 【理由】 乾燥帯だから朝、夜下は寒いから。 持ち物 半ズボン、かざ(扇子)
食事を用意しよう	こんな食事を用意しよう! 焼肉屋(牛肉) BBQ 【理由】 牛肉をよくだべるから。	こんな食事を用意しよう! カレー、お粥 【理由】 辛いのが好き、魚、貝、麺、ワサビ	こんな食事を用意しよう! 焼き鳥 【理由】 1本の焼鳥のかわり。

5 単元を通した生徒の変容

- ◇ 各自が一つの観点について責任をもって調べ、調べたことを伝え合う活動を通して、複数の情報を組み合わせたり、必要な情報を選択したりしながら考察することができた。さらに、世界各地の人々の生活が自然及び社会的条件と深く関連していることについて、多面的・多角的に理解を深めることにつながった。
- ◇ 単元の終末に「おもてなしプラン」を作成することを通して、世界各地の生活や環境の多様性について改めて気付き、理解を深めていた。また、異文化を尊重する気持ちをもつことにもつながった。さらに、次の単元である世界の諸地域の地理的特色に向けた新たな問いをもつ姿も見られた。

6 まとめ

従来の調べ学習では、生徒全員が学習課題全般を調べるため、得られた情報が浅く広くなりがちであった。また、最終的に教師がまとめてしまい、生徒の思考が深まらないことが少なくなかった。

本事例では、課題解決につながる観点を分担して追究し、それらを関連付けたり統合したりして考察を導き出すという協働的な活動を取り入れた。このことにより、生徒は多面的・多角的に理解を深めることができた。

また、東京オリンピック・パラリンピックに向けた「おもてなしプラン」の作成により、学習意欲が喚起され、学習内容の更なる理解へとつながった。

今後は、生徒が多面的・多角的に考察して学習内容を着実に理解するために、協働的な活動を通して考えを深めたり広げたりする過程を取り入れるとともに、課題設定を工夫することが求められる。

小学校第5学年 算数

1 単元名「分数のたし算とひき算」

2 単元を通して身に付ける力

**異分母の分数の加法及び減法の
計算の仕方を考え、活用する力**

これまで

グループでの話合いや、全体での発表は行われているが、教師がまとめている。

本研究では

児童から出た考えを多様な観点から比較し、児童自らよりよい方法を見いだした。

3 指導計画（10時間扱い）

第1～4時【本時（第3時）】

<大きさの等しい分数>

通分の意味を理解し、異なる分母の分数の大きさを比較する。

第5・6時

<分数のたし算>

異なる分母の分数の加法の計算の仕方を考える。

第7・8時

<分数のひき算>

異なる分母の分数の減法の計算の仕方を考える。



第9・10時

<分数のたし算とひき算の活用>

異なる分母の分数の加法・減法を用いて、実生活の場面における課題を解決する。

4 本時（第3時）

【本時で身に付ける力】 異分母の分数の大小を比べる方法について考える力

学習過程	学習活動	具体的な手だて	評価規準（評価方法）
導入	○ 異分母の分数の大きさの比べ方について課題を把握する。	前時に学習した大きさの等しい分数の表し方について、全体で確認する。	
	分母の違う分数の大きさの比べ方について考えよう。		
展開	○ 自力解決に取り組む。 ① ○ よりよい考えを話し合う。 ②	既習の考え方を基に、解決するよう促す。 複数の考えを全体で共有できるよう、児童の考えを把握する。	【数学的な考え方】 分数を線分図など図や数で表し、分数の大きさについて考えている。（ノート）
	【線分図】  【図】 	【小数で表す】 $\frac{4}{5}=0.8$ $\frac{2}{3}=0.6666\dots$ だから、 $\frac{4}{5}$ は $\frac{2}{3}$ より大きい	【分母を揃える】 $\frac{4}{5}=\frac{12}{15}$ $\frac{2}{3}=\frac{10}{15}$ だから、 $\frac{4}{5}$ は $\frac{2}{3}$ より大きい
	○ 通分の意味を理解する。	児童から出てきた考え方について、次に同じような課題に対して、よりよく解決できる方法は何か、話合いの視点を示す。	【残りで比べる】 $1-\frac{4}{5}=\frac{1}{5}$ $1-\frac{2}{3}=\frac{1}{3}$ 残りが大きいのは $\frac{1}{3}$ だから、 $\frac{4}{5}$ のほうが $\frac{2}{3}$ より大きい
まとめ	○ 適用問題で何ができるようになったか、学習を振り返る。 ③	2つの分数の分母を掛け合せたとき、最小公倍数にならない数（ $\frac{5}{6}$ と $\frac{8}{9}$ など）を提示する。 本時における学んだことは何かを振り返るよう、振り返りの視点を示す。	

【本単元で最も重視した〈活動+要素〉を踏まえた学びの流れ】



1 自力解決する (協働的な活動につながる言語活動)



課題を把握し、既習の考え方をを用いて、自ら課題を解決する活動

「前の時間に $\frac{1}{2}$ は $\frac{2}{4}$ と同じになることを数直線で確かめたな。」
「分数を小数で表してみよう。」と、既習の考え方を使った。

2 よりよい解決方法を見いだす (協働的な活動)



「分母が大きいときには、数直線で表したり、小数に表したりするのは大変だね。」
「分母を揃える方法は、いつでも使えそうだよ。」
「別の分数で調べてみようよ。」など、複数の考え方からよりよい解決の方法を話し合った。



3 「どのような力を身に付けたか」振り返る (自己の考えを深める言語活動)

分数は、分数の大きさを比べるだけでなく計算にも使えるかもしれないな。と思いました。

本時で何を学んだのか、どのような力が身に付いたのか確かめる活動

適用問題で、何ができるようになったか確かめた。
また、左のように次の学習に生かそうとする姿が見られた。

課題解決の方法を多面的・多角的に捉え、よりよい解決の方法を話し合う活動

5 単元を通じた児童の変容

◇ 単元を通して、多様な考えの中から課題を解決するためのよりよい方法は何かを話し合い、その方法を用いて、適用問題を解決した。

その結果、新たな課題に対して、自分の解決方法がどんな場面でも適用できるか、もっとよい方法はないかなど、前時までの学習を振り返り、考える姿が見られた。

◇ また、振り返りの場面において、何ができるようになっただけでなく、本時の学習が次の学習にどのように生かせるかなど、学んだことを基に新たな課題を見通す姿が見られた。

6 まとめ

児童から出た考えを基に「この考え方はいつでも使えそうだね。」と算数のよさ等について教師が価値付けしてしまうことがある。しかし、本来は子供が主体的に算数のよさを見いだしていくことが大切である。

本事例では、児童から出た意見を基に、様々な観点から比較・検討し、課題を解決する協働的な活動を取り入れた。その際、限られた人数で構成されたグループだけでなく、全体で話し合う活動が効果的であった。

また、振り返りの場面では、協働的な活動で見いだしたよりよい考え方が使えたことを実感し、何を学んだか等、自己の考えを深め、次の学習につなげていくことが大切である。

今後は、児童が全体の話合いの場面で、考え方の発表で終わることなく、それぞれの方法について多様な観点から比較し、よりよい考え方はどれかを考え、その考え方を活用し、個の学習において、技能を習得し、学びを深めていくことが大切である。

中学校第3学年 数学

1 単元名「二次方程式」

2 単元を通して身に付ける力

**二次方程式を
具体的な場面で活用する力**

3 指導計画（全15時間扱い）

第1・2時

＜二次方程式の解と
その意味＞

二次方程式の必要性和意味及び解の意味を理解する。

第3～10時

＜二次方程式の解き方＞

因数分解、平方根、解の公式を用いて二次方程式を解く。

第11・12時

＜いろいろな二次方程式の
解き方＞

既習の二次方程式の解き方を利用して、いろいろな形の二次方程式を解く。

第13～15時【本時（第13時）】

＜二次方程式の利用＞

具体的な場面から数量関係を見だし、二次方程式を用いて課題を解決する。

これまで

【基礎・基本クラス】

教えるべき内容が多いため問題解決的な学習は難しいと思われてきた。

【発展クラス】

集団による話し合い活動は行われていたが、考え方の発表にとどまっていた。

本研究では

【基礎・基本クラス】

課題を解決するための見通しについて話し合う活動を位置付けた。

【発展クラス】

集団による話し合いで終わらせず、個人の振り返り場面を設定した。

4 本時（第13時）

【本時で身に付ける力】 具体的な数量関係から二次方程式を立式し、解くことができる力

学習過程	基礎・基本クラス		発展クラス		評価規準 (評価方法)
	学習活動	具体的な手だて	学習活動	具体的な手だて	
導入	<ul style="list-style-type: none"> ○ 課題1を把握する。 ○ 結果の見通しを立て、自力解決する。 ① 	<p>結果の見通しや、その理由を問う発問をする。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 本時の課題を把握し、自力解決を行う。 ① 		<p>発展クラス【数学的な見方や考え方】 具体的な事象の中の数量の関係を捉え、二次方程式をつくることができる。(ノート)</p>
展開	二次方程式を利用して、課題を解決しよう。				
	<ul style="list-style-type: none"> ○ 本時の課題を把握し、自力解決に取り組む。 ○ 課題を解決するための見通しを学習班で話し合い、課題を解決する。 ② 	<p>どのように考えたらよいか、解決の方法について話し合う活動を設定する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 学習班で自分の考えを説明し、相手の考えと比較する。 ② ○ 全体で複数の考え方を共有し、よりよい解決方法を選択する。 ③ 	<p>自分と相手の考え方の違いは何か、同じところは何か、簡単な方法はどれかなど、相手の考えを聞く視点を示す。</p>	<p>基礎・基本クラス【数学的な見方や考え方】 具体的な事象の中の数量の関係を捉え、二次方程式をつくることができる。(ノート)</p>
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> ○ 適用問題に取り組む。 ○ 学習を振り返る。 	<p>何ができるようになったか、どのように考えればよかったかなど振り返りの視点を示す。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ よりよい解決の方法を活用し、適用問題に取り組む。 ○ 学習を振り返る。 	<p>何ができるようになったか、どのように考えればよかったかなど振り返りの視点を示す。</p>	

【本単元で最も重視した〈活動+要素〉を踏まえた学びの流れ】

活動
協働的な活動



要素
物事を多様な観点から
考察する



他者との対話を通して、課題解決に向けた考え方や方法について、複数の視点から考える。

【基礎・基本クラス】

1 課題(2)の見通しをもつ (図と式を関連付ける言語活動)

(課題1) 右の二つの図のように、横の長さが縦の長さの2倍である長方形の土地がある。図のように別な場所に幅が4mである道を作った。このとき、色の付いた部分の面積の関係を調べよう。



課題を解決する前に、「色の付いた部分の面積は同じではないか。」と、結果を見通した。

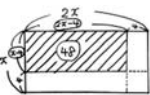
既習である二次式を用いて、二つの式の関係についてまとめた。次の課題を解決するための見通しにつながる考え方の理解につながった。

自力解決後、課題から何が言えるか共有する活動

2 学習班で話し合う 協働的な活動



「全体から道の面積を引いてみようよ。」「重なったところどうするの。」「道をずらしても面積変わらないのだから、ずらした方が簡単じゃないかな。」など、解決の方法を話し合った。



どのような方法で課題を解決することができるか、見通しについて話し合う活動

【発展クラス】

1 自力解決する (自分の考えを表現する言語活動)



「長方形から道の部分を引いた面積と 0cm^2 で二次方程式をつくる。」「他に考え方はないかな。」など、解決するための見通しを立て、自分の考えを表現した。

2 学習班で話し合う 協働的な活動



「私の式とあなたの式が違うのはどうしてかな。」「道の重なった部分はどうしたの。」など、互いに質問をしながら、解決に向かうまでの考え方について話し合った。

自分と他者の考えを比較し、解決する方法を多面的・多角的に捉え、話し合う活動

3 よりよい解決方法を見いだす 協働的な活動



「全体から道を引く方法でもできるけど、道をずらす方法のほうが簡単だね。」「式も簡単に作れるし、私もその方法がいい。」と、なぜその方法がよいのか話し合った。

複数の考え方を比較し、課題を解決するためのよりよい方法は何か、理由を明らかにしながら話し合う活動

5 単元を通した生徒の変容

【基礎・基本クラス】

- ◇ 単元を通して、自力解決の過程で、考え方の見通しについて話し合う活動を取り入れることで、不足している考え方を補ったり、新たな視点で解決しようとしたりする姿が見られるようになった。
- ◇ 問題の場面を的確に捉え、式を立てることや、図や表で考えることのおよさなどを実感させていくことを通して、課題を多面的・多角的に捉えることができるようになった。

【発展クラス】

- ◇ 既習事項の活用場面において、一つの解決方法を相手に説明できるよう表現させたり、様々な解決の方法を考えさせたりすることで、次の新たな課題に対しても、多面的・多角的に課題を捉えることができるようになった。
- ◇ 振り返りの場面において、協働的な活動を通して、本時でどのように考え、何ができるようになったか、個の学びに戻していくことで、学びの深まりを実感することができた。

6 まとめ

数学の苦手な生徒にとって、課題を解決するに当たり、見通しを立てることは難しい。

そこで、本事例の「基礎・基本クラス」では、課題解決の過程における見通しをもつ場面において協働的な活動を位置付けた。そのことにより、課題を把握する段階で全員が話し合いながら見通しを立て、学習班での活動がただの教え合いの活動にとどまらず、課題解決を行うことができた。

また、「発展クラス」においては、協働的な活動において、相手の考えと比較しながら考察し、自分の考えを深めることに重点を置いた。このことにより、どの方法が効率的かその理由を考え、適用問題を解くことで、力が付いたことを実感することにつながった。

今後は、生徒の実態(習熟度)に応じて、生徒が本時の課題を解決するために必要とする既習の考え方は何かを教師が明確にもち、課題を工夫することが必要である。

小学校第6学年 理科

1 単元名「電気の利用」

2 単元を通して身に付ける力

電気の性質や働きについて推論する力

3 単元の指導計画（12時間扱い）

第1～3時【本時（第1時）】

<電気をつくる>

実験を通して、電気の作られ方について理解する。

- ・課題を発見する実験、仮説設定（第1時）
- ・仮説を確かめる実験（第2時）
- ・考察（第3時）

第4～6時

<電気をためる>

実験を通して、電気をためられることを理解する。

- ・課題を発見する実験、仮説設定（第4時）
- ・仮説を確かめる実験（第5時）
- ・考察（第6時）

第7～12時

<生活の中の電気>

電気が熱に変換できることを生活体験から想起し、発熱の量について理解する。
実生活における電気の利用について理解する。

これまで

生活との関連が図られた実験、児童が実感を伴う実験に至っていなかった。

本研究では

生活と関連をもたせ実験を行い、気付いたことや疑問を基に、児童が課題を発見し、課題解決のための仮説を立てた。

4 本時（第1時）

【本時で身に付ける力】 実験を通して、電気の性質や働きについて仮説を立てる力

学習過程	学習活動	具体的な手だて	評価規準（評価方法）
導入	○ 手回し充電ラジオについて知り、中身の構造を知る。	生活と関連した教材を準備する。 モーターの存在に気付くよう、レバーの回す速さを変えて、演示する。	
体験したことから出てきた疑問を基に、学習問題を立てよう。			
展開	○ 手回し発電機を回して電気をつける。 ① ○ 手回し発電機を回しながら、気付いたことや疑問をノートに書いていく。 ○ 気付いたことや疑問に思ったことを実際に演じながらグループで考えを共有する。 ②	回す向きや速さにより、電球のつき方の違いに気付くよう、豆電球とLED電球の2種類を使用する。 個人の気付きや疑問を実演しながら伝えるよう、指示する。 新たな気付きや疑問があった場合は、その都度ノートに記録するよう指示する。	【自然事象への関心・意欲・態度】 電気の利用の仕方に関心・関心をもち、自ら電気の性質や働きを調べようとしている。（観察）
まとめ	○ グループで出た疑問や考えを基に、学習問題を考える。 ③ ○ 学習問題を解決するためにどのように調べたらよいか仮説を立てる。	実験で得られた結果から調べてみたいことを学習問題に設定するよう促す。 手回し発電機の「回す向き」と「回す速さ」に視点を当てる。	【科学的な思考・表現】 電気の性質や働きとその利用について予想や仮説をもち、推論しながら追究し、表現している。（ノート）

【本単元で最も重視した〈活動+要素〉を踏まえた学びの流れ】

活動

体験活動



要素

問題を発見・解決する、
新しいアイデアを生み出す



実験を通して、気付いたことや
考えたことを基に、学習問題を設
定し、仮説や検証方法を考える。

1 気付きを促す

体験活動



手回し発電機の回す向きや速さなどによって、電球のつき方の違いに気付く活動

「手回し発電機の回す向きを変えると豆電球はつくけど、LED電球がつかない。」など、手回し発電機の回し方を変えて、電球のつき方の違いに気付いた。

2 個人の気付きを共有する

体験活動



個人で考えた気付きを、他者と共有するために、実際に手回し発電機を回す活動

「豆電球は、回す速さを変えたら明るさが変わるよ。」「回す向きは豆電球には関係ないみたい。」など、個人が発見したことを説明し、疑問になることや気付きを共有した。

3 学習問題を設定し、仮説を立てる

(体験活動を基に自分の考えをまとめる言語活動)



気付きや疑問から学習問題を設定し、それを解決するために仮説を立てる活動

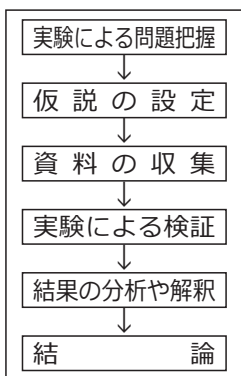
「回す速さを速くすると、豆電球が明るくなるということは、電流の流れ方が違うのではないかな。」と、それぞれ実験から得られたことを基に、仮説を立てた。

		右回し	左回し
LED	○	明るく光った。	光らなかつた。
	×	光らなかつた。	明るく光った。
豆電球	○	明るく光った。	明るく光った。
	×	明るく光った。	明るく光らなかつた。

○… + (+) を正しく回したとき。
 ×… + (+) + (-) をつけたとき。
 回す速さによって豆電球の明るさが変わった。

5 単元を通じた児童の変容

- ◇ 気付きを促すための実験を通して得られたことを、相手に実演しながら説明していくことで、「私もそれに気付いた。」「本当だ。やってみよう。」「本当にそうなの。確かめさせて。」など、互いに実演し合う姿が見られた。それによって、多面的・多角的に電気の利用について捉えられ、



問題の発見、それを解決する姿が見られた。

- ◇ 本研究では、左の学習活動を小単元で学ぶ際のサイクルにすることによって、児童は、問題把握のための実験において様々な方法で試行し、自分で発見したことをなぜそうなるのだろうと考えることができた。

6 まとめ

これまでも教師の演示実験が行われているものの、生活との関連が希薄であったり、児童が実感を伴っていないかたりすることで、児童が課題(学習問題)を発見するまで至っていないことがあった。そのため、児童の多様な疑問や気付きが、次の学習に十分に生かされていないといった指摘もある。

本事例では、実験の時間を十分に確保することで、児童が自由に試行し、疑問や気付いたことを、実演しながら伝え合い、現象を多面的・多角的に捉えた後、自分の考えを整理し、まとめた。そのことにより、児童は共通の認識の下、学習問題を設定し、仮説を立てることができた。

今後は、問題把握から結論に至る学びの過程を重視し、児童から出てきた疑問や気付きを基に、グループで解決の方法を話し合い、実験したことを基に、個人で考察することが大切である。

中学校第2学年 英語

1 単元名「助動詞 (should、must、have to、may)」

2 単元を通して身に付ける力

助動詞を用いて、相手に伝えたい内容を適切に表現する力

3 指導計画 (12時間扱い)

第1～6時
 <教科書本文及び助動詞の理解や定着>

教科書教材を通して、助動詞 (should、must、must not、have to、don't have to、may) を用いた表現を学習するとともに、欧米文化を知る。

第7・8時【本時】
 <助動詞を使用して互いの考えや気持ちを伝え合う活動>

アメリカからの転入生に、日本の学校生活について、これまで学んだ助動詞を用いて、分かりやすく効果的に説明する文を協働的に考える。

第9時
 <助動詞の理解や定着>

助動詞の文法的な復習を行い、助動詞の働きを理解する。

第10時
 <本文の理解や定着>

本単元の内容を理解できているかどうかを確認するために、単元テストとリスニングテストに取り組む。

第11・12時
 <助動詞の理解や定着>

各自が作成したアメリカからの転入生へのアドバイスに工夫を加える。また、パフォーマンステストに取り組む。

これまで

文法事項等を習得させることに主眼を置いてしまい、子供による主体的な表現活動が十分ではなかった。

本研究では

身近な場面と興味を喚起する課題を設定し、伝えたい内容を効果的に表現する学習を協働的な活動を通して行った。

4 本時 (第7・8時)

【本時で身に付ける力】 助動詞を用いて、相手に伝えたい内容を適切に表現する文を書く力

学習過程	学習活動	具体的な手だて	評価規準 (評価方法)
第7時	<ul style="list-style-type: none"> ○ 課題を把握し、見通しをもつ。 ○ VTRにおさめたアメリカからの転入生のメッセージを見て、日本とアメリカの学校の違いについて知る。 ○ 六つの助動詞 (should、must、must not、have to、don't have to、may) の意味や用法について確認する。 	日本とアメリカの学校の違いについて解説する。	
	アメリカからの転入生へのアドバイスを考えよう。		
第8時	<ul style="list-style-type: none"> ○ アメリカからの転入生に、日本の学校生活について教える文を、助動詞を使って、個人で考える。 1 	説明文を考える際に、生徒手帳や「生活のきまり」がヒントになることを伝える。	【外国語表現の能力】 「転入生に日本の学校の特徴を分かりやすく伝える」という課題にふさわしい文を、六つの助動詞を用いて、適切に書くことができる。 (ワークシート)
	<ul style="list-style-type: none"> ○ グループで、協働して助動詞を含む説明文を考える。 2 ○ 考えた説明文をクラス全体で伝え合う。 3 ○ 各グループの説明文から、参考になった文を選び、その理由を書く。 4 	まず、各自が書いた六つの助動詞を含む文を交換させる。その後、全体発表する六つの文をグループで話し合いながら作成するように指示する。 特徴的な内容や、習っていない単語などについて適宜解説する。	
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> ○ 学習カードに授業評価を記入する。 	学習活動を振り返り、当初の自分の文と、協働して考えた文や他グループの文とを比較させ、表現力が付いたことを実感させる。	

【本単元で最も重視した〈活動+要素〉を踏まえた学びの流れ】

活動
協働的な活動

+

要素
問題を発見・解決する、
新しいアイデアを生み出す



海外からの転入生に対するよりよいアドバイスを、生徒同士の学び合いを通して考える。

1 個人で説明文を考える (各自で表現する言語活動)



「転入生はきっと、こんなことに戸惑うんじゃないかな。」と考えながら作文していた。

個人で、助動詞 (should、must、must not、have to、don't have to、may) を用いて、アメリカからの転入生へのアドバイスを考える活動

2 グループで説明文を考える 協働的な活動



「確かに、この内容だったらmayがぴったりくるね。」など、伝えたいことを適切に表現している説明文をグループで選んだり、文法の間違いを直したりしていた。

各自が考えた例文を基に、ワークシートを交換して見せ合い、比較し、協働しながらグループとしてのよりよい説明文を考える活動

4 個人でよりよい説明文を考える (各自で表現を見直す)

◆アドバイス	You must come to school until eight thirty.
◆選んだ理由	until という前置詞と must の助動詞をうまく、かつ わがやまの使っているから。

各グループの説明文から、参考になった文を選び、その理由を書く活動

どのような点が適切であるかを考えながら、状況にふさわしい助動詞の使い方の理解を深めていった。

3 全体で伝え合う 協働的な活動



自分のグループでは気が付かなかった視点や、助動詞の使い方について学び合った。

グループで考えた説明文を、全体の前で伝え合い、比較する活動

5 単元を通した生徒の変容

- ◇ 「日本の学校生活についてアドバイスする」という生徒にとって身近な課題を設定することで、具体的な場面や状況が想定しやすくなり、「助動詞を使って、ぜひこの決まりを説明してみたい。」という、主体的に学ぼうとする姿が多く見られた。
- ◇ 協働的な学習において、グループ協議の中でアドバイスを得たり、他グループの優れた表現を学んだりすることにより、当初に自分が書いた文にはなかった新たな視点や発想を学んでいた。
- ◇ 単元終末に行ったパフォーマンステストへの取組により、更に助動詞を正しく活用し、適切に表現する力を身に付けた。自己評価においても、力が身に付いたことを実感している評価が多く見られた。

6 まとめ

助動詞は、「教えやすい言語材料」の一つであることから、助動詞の意味や文中の語順を理解させることで、定着が図られたと判断することが少なくない。

しかし、知識を有することと、適切に活用できることは別である。「活用する力」を育むためには、生徒に「この表現を使ってみたい。」と思わせるような場の設定や、効果的な表現に多く触れさせる必要がある。

そこで、本事例ではまず、海外からの転入生に自分の学校のルールを説明するという課題解決の場面を設定し、生徒の関心・意欲を高めた。次に、〈個人学習〉→〈グループ協議〉→〈全体発表〉→〈個人での振り返り〉といった、学び合う学習過程を設定して、より効果的に相手に伝える表現について考察させた。これらの指導の工夫により、本単元の目標である、助動詞を用いた適切な表現力を育成することができた。

今後、単なる文法事項等の習得だけでなく、それを適切に活用する力を確実に育成するために、生徒にとって必然性のある「場」や「課題」の設定や、協働的な「学習過程」の導入を推進していく必要がある。

健全育成部会

子供が「どのような力を身に付けるか」を明確にしたPDCAサイクル

P 子供が「どのような力を身に付けるか」(Plan)

「資質・能力」の中から主に「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか」に重点を置き、「学びに向かう力、人間性等」の育成を目指す六つの事例を開発した。

事例を開発するに当たり、「単元（題材）で身に付ける力」を位置付ける際に、「学びに向かう力、人間性等」との関連をもたせ、指導計画を立案した。

学びの質や深まりを促すための活動の工夫

D 子供が「どのように学ぶか」(Do)

学びの質や深まりを促すため、活動（言語活動・体験活動・協働的な活動のうちの一つ）に、「学びに向かう力、人間性等」を構成する次の三つの要素から一つを選んで組み合わせた。

【要素4】 自分とよりよく関わる

【要素5】 他者とよりよく関わる

【要素6】 社会とよりよく関わる

例) 小学校第2学年 生活「おもてなし名人になろう」

これまで 茶道体験等の活動は取り入れられてきたが、体験すること自体が目的となり、活動を振り返ったり、学んだことを次の学習に生かしたりすることが十分ではない、といった課題が散見された。

本研究では 単元で身に付ける力を『おもてなし』の心をもち、他者と進んで交流しようとする態度」と設定し、「体験活動」に要素5「他者とよりよく関わる」を組み合わせ、「茶道体験を通して『おもてなし』を理解し、学んだことを活用して家族をもてなす」活動を設定した。

期待される効果 児童が「茶道を体験することを通して『おもてなし』とは何かについて学ぶ」という目的を明確にもって主体的に活動に取り組む「学びの質」と、学んだことを活用してもてなす体験を通して「おもてなし」について更に理解を確かにする「学びの深まり」の実現を目指した。

C 子供が「Planで設定した力を身に付けたか」(Check)

子供の姿を基に評価するだけでなく、子供自身が学習を振り返り、自己評価する場面を設定した。振り返りの視点として、次の2点を示し、学習の感想に終わることのないようにした。

(1) どのように意識が変容していったか。

(2) どのような態度が身に付いたか。身に付けた態度を今後どのような場面で活用するか。

このことにより、身に付けた力を活用して次時の学習に取り組む流れをつくり、単元（題材）を通した「学びに向かう力、人間性等」の育成を図ることとした。

A 授業改善 (Action)

C (check) の結果を踏まえて、子供が更に力を身に付けるために「どのように学び、深め、広げていくか」という視点で授業改善を行うこととした。

具体的には、身に付ける力の育成が十分図られなかった場合は、活動への要素の組み合わせ方を修正するなど、単元（題材）を通して見直しを行うこととした。

実践事例一覧

教科等	内 容 等	事例頁
生活 小学校 第2学年	<ul style="list-style-type: none"> ◎ 単元名 おもてなし名人になろう ◎ 単元で身に付ける力 「おもてなし」の心もち、他者と進んで交流しようとする態度 ◎ 活動と要素 「体験活動」+「他者とよりよく関わる」 ⇒ 茶道体験を通して、「おもてなし」を理解し、学んだことを活用して家族をもてなす。 【内容】 ゲストティーチャーから、もてなしを受ける体験から「おもてなし」の意味を学び、学んだことを活用して家族をもてなす。 	26 ・ 27 ページ
図画工作 小学校 第5学年	<ul style="list-style-type: none"> ◎ 題材名 染小紋のひみつ ◎ 題材で身に付ける力 作品のよさや美しさを自分の思いをもって味わおうとする態度 ◎ 活動と要素 「体験活動」+「自分とよりよく関わる」 ⇒ 模様の美しさや特徴を捉えるために、実物に触れ、染物職人と対話し、気付いたことを書いて伝え合ったりする。 【内容】 染物職人から話を聞いたり、実物に触れたりすることを通して、伝統的な作品を鑑賞し、作品のよさや美しさを言葉で表現し共有する。 	28 ・ 29 ページ
特別活動 小学校 第4学年	<ul style="list-style-type: none"> ◎ 単元名 いじめをなくそう ◎ 単元で身に付ける力 いじめをなくすために行動しようとする態度 ◎ 活動と要素 「協働的な活動」+「自分とよりよく関わる」 ⇒ いじめをなくすための解決策を話し合い、そのために自分がどう行動するかを考える。 【内容】 いじめ問題に関して、自分の周りでいじめが起こった時に自分はどうか行動するかを考えたり、いじめを未然に防ぐための方法を学んだりする。 	30 ・ 31 ページ
学総合的 学習の 時な間 中学校 第2学年	<ul style="list-style-type: none"> ◎ 単元名 地域に貢献しよう ◎ 単元で身に付ける力 地域に貢献しようとする態度 ◎ 活動と要素 「協働的な活動」+「社会とよりよく関わる」 ⇒ 地域の方と意見を交流し、様々な状況を想定して解決策を考える。 【内容】 地域の方と協力して避難所運営計画を作成することを通して、地域の一人としての自覚を高める。さらに、地域に役に立つ活動（清掃や植栽等）を計画し、実践する。 	32 ・ 33 ページ
特別活動 中学校 第3学年	<ul style="list-style-type: none"> ◎ 単元名 音楽祭に取り組もう ◎ 単元で身に付ける力 課題を解決に導こうとする態度 ◎ 活動と要素 「協働的な活動」+「他者とよりよく関わる」 ⇒ 1年生が抱えている不安や課題を把握して適切な助言をする。 【内容】 3年生全員がリーダーとなり、1年生が抱えている不安や課題を把握して、適切な助言をすることにより、1年生の音楽祭への取組を充実させる。 	34 ・ 35 ページ
特別活動 中学校 生徒会・ プロジェクト チーム	<ul style="list-style-type: none"> ◎ 単元名 校区のいじめをなくすために ◎ 単元で身に付ける力 校区のいじめを解決しようとする自主的・実践的な態度 ◎ 活動と要素 「協働的な活動」+「他者とよりよく関わる」 ⇒ 校区の学校生活をよりよくするために、相手を思い、いじめのない学校づくりについて話し合い、考える。 【内容】 校区内のいじめに関する課題を把握し、解決策を考え計画する。また、校区の小学生に呼び掛けて、「いじめのない校区」を目指す取組を共に実践する。 	36 ・ 37 ページ

小学校第2学年 生活

1 単元名「おもてなし名人になろう」

2 単元を通して身に付ける力

**「おもてなし」の心を持ち、
他者と進んで交流しようとする態度**

3 指導計画（5時間扱い）

第1時
＜「おもてなし」
に関心をもつ＞
家族への「ありがとうの会」を開くという目的を知り、「おもてなし」について知っていることを話し合う。

第2時【本時】
＜「おもてなし名人」から学ぶ＞
茶道体験を通して、もてなしの仕方を学び、もてなされる気持ちを共有することで「おもてなし」の意味を考える。

第3・4時
＜家族に「おもてなし」をする＞
第3時 家族をもてなすためにどうしたらよいかを話し合い、「ありがとうの会」の計画を立てる。
第4時【本時】 「ありがとうの会」を開き、家族をもてなす。

第5時
＜学習の振り返り＞
学習したことを振り返り、「おもてなし」の心をどのような場面で生かしていきたいか話し合う。

これまで

体験活動が目的となり、体験活動を振り返ったり、学んだことを次の活動に生かしたりすることが十分ではなかった。

本研究では

体験活動を通して学んだことを振り返る言語活動と学んだことを生かす活動を設定した。

4 本時（第2～4時）

【本時で身に付ける力】 「おもてなし」の意味を理解し、進んで交流しようとする態度

学習過程	学習活動	具体的な手だて	評価規準（評価方法）	
第2時	導入	○ 本時のめあてを把握する。	『「ありがとうの会」に向けて、『おもてなし』を体験し、考える』という学習の目的を確認する。	
	展開	○ 茶道の講師から、「お茶の心」について説明を受ける。 ○ 茶道の講師からもてなしを受ける。 1 ○ 茶道体験を振り返り、もてなしを受けた感想や疑問を伝え合う。 2	見たり、聞いたり、感じたりするポイントを確認する。 (名人の姿勢、動き、言葉遣い等) もてなしを受けたときの気持ちや気持ち、疑問について伝え合うことを確認する。 お茶碗を回す理由や丁寧な所作について話し合わせる。	【身近な環境や自分についての気づき】 言葉や表情、しぐさなど、多様な伝え方があることに気付いている。 (行動観察、ワークシート)
	まとめ	○ 「おもてなし」の意味を考え、自分の言葉で説明する。	話し合ったことを基に考えさせる。	
第3時	展開	○ 「ありがとうの会」に向けて計画・準備をする。	家族に喜んでもらうという視点で計画を立てさせる。	【活動や体験についての思考・表現】 体験を基に感謝の気持ちの伝え方を考え、計画を立てている。 (行動観察、ワークシート)
	展開	○ 「ありがとうの会」を開く。 「おもてなし」について学んだことを生かして、家族をもてなす。 3	茶道体験を生かして、家族のために心を込めてもてなすことができるように支援する。	【生活への関心・意欲・態度】 相手の気持ちを考え、表情やしぐさ、態度などで気持ちを表そうとしている。 (行動観察、発言)

【本単元で最も重視した〈活動+要素〉を踏まえた学びの流れ】

活動

体験活動



要素

他者とよりよく関わる



茶道体験を通して、「おもてなし」を理解し、学んだことを活用して家族をもてなす。

1 「おもてなし」を受ける。 (体験活動)



茶道の講師からもてなしを受ける活動

講師がお茶を点てる動き、点てたお茶を美しく運ぶ姿勢、一人一人の前にひざまずき差し出す際の表情などを児童は片時も目を離さず見守った。動作の一つ一つに「おもてなし」の心が込められていることを、児童は実際に見て感じ取った。

2 茶道体験を振り返る。 (学びを振り返るための言語活動)



「おもてなし」について話し合う活動

「嬉しい気持ちになった。」
「動きがとても丁寧だった。」
と、もてなされる立場に立って気付いたことや感想を伝え合った。

次に、「お茶を出す時に、茶碗を回すのはなぜだろう。」という教師の問い掛けから、所作の理由やもてなす立場の心構えを考え「『おもてなし』とは相手に喜んでもらうためにすること」と気付くとともに、「自分もやってみたい。」と意欲をもった。

3 「おもてなし」をする。 (体験活動)

自分が点てたお茶を丁寧に運び差し出した。そして、相手の目を見て、両手をついてしっかりお辞儀をした。

自分のもてなしによって家族が喜んでくれる姿を見て、「おもてなし」の意味を再確認した。



家族をもてなす活動

「おいしくなあれ。」
とつぶやきながら、家の人に喜んでもらえるように心を込めてお茶を点てた。

5 単元を通じた児童の変容

- ◇ 事前のアンケートでは、「『おもてなし』とはどういうことか」の問いに対し、「お菓子や物をあげること」と答える児童がほとんどであった。しかし、事後のアンケートでは、「相手を喜ばせること」「相手の気持ちを考えること」と回答する児童が多数を占めた。「おもてなし」とは相手を思う気持ちからの行為であることを理解し、自分の言葉で表現することができた。
- ◇ もてなす体験では、「家の人を喜ばせたい。」という気持ちで計画を立て、実行した。丁寧な所作でお菓子やお茶を運んだり、両手をついてお辞儀をしたりするなど、「おもてなし」の意味について学んだことを生かして活動する姿が見られた。家族が喜ぶ姿を見て、「おもてなし」の意味を再確認し、もてなすことの喜びを感じることができた。

6 まとめ

体験活動については、活動すること自体が主な目的となり、活動を通して学んだことを振り返ったり、学んだことを生かしたりすることが必ずしも十分ではない、という課題が指摘されている。

本事例では、実際にもてなしを受ける体験活動を行い、体験活動後に気付きや疑問を話し合う言語活動を取り入れることで「おもてなし」の意味について考え理解し、自分の言葉で表現することができた。そして、学んだことを活用する場面を設定した。家族をもてなす体験活動を通して「おもてなし」の意味の理解を深め、もてなす喜びや交流する楽しさを実感し、他者と関わることへの意欲を高めた。

今後は、体験活動を行うだけでなく、言語活動を取り入れて学びを価値付け、さらに学びを生かす活動を設定し、児童の主體的な活動につなげていくことが大切である。

小学校第5学年 図画工作

1 題材名「染小紋のひみつ」

2 題材を通して身に付ける力

**作品のよさや美しさを
自分の思いをもって味わおうとする態度**

3 指導計画（3時間扱い）

第1時

<課題把握、表現活動>

染小紋と同じ型紙を使った版表現に取り組み、表し方を体験的に捉える。

第2・3時【本時】

<鑑賞活動>

染小紋の美しさ、模様の意味や特徴、伝統文化のよさについて、染物職人の方の話を聞いたり、実物に触れたりして鑑賞する。

これまで

伝統的な作品は、自分の感覚や活動を通してよさや特徴を捉えることが必ずしも十分ではなかった。

本研究では

鑑賞する伝統的な作品と同じ表現方法を体験したり、実物に触れて鑑賞したりすることを通して、よさや美しさを捉えた。

4 本時（第2・3時）

【本時で身に付ける力】 作品のよさや美しさを自分の思いをもって味わおうとする態度

学習過程	学習活動	具体的な手だて	評価規準（評価方法）
導入	○ 実物を見て、染小紋に関心をもつ。	遠くから見る、近付いて見るなど、鑑賞の仕方を伝える。	
	染小紋に親しみ、特ちょうを見付けよう。		
展開1	○ 染物職人の話を聞く。 ○ 実物や型紙を鑑賞する。 ①	「粋」という染小紋の伝統的な表現の意図や特徴を説明する。 細かい点でできている模様、連続した模様、文字を組み合わせでできている模様など、それぞれの模様の特徴を捉えやすいように、特徴ごとに鑑賞コーナーを設置する。	【造形への関心・意欲・態度】 染小紋のよさや美しさを感じ取り、表し方の意図や特徴を捉え、自分なりに味わおうとしている。 (行動観察)
展開2	○ 気付いたことや感じたことを鑑賞カードに記入する。 ② ○ 気に入った作品を伝え合う。 ③	模様の意味や特徴について、気付いたことや感じたことを記入するように伝える。 友達に伝える際は、気に入った作品を見せながら説明するよう促す。	【鑑賞の能力】 染小紋のよさや美しさを感じ取り、表し方の意図や特徴を捉える。 (鑑賞カード) 【造形への関心・意欲・態度】 染小紋のよさや美しさを感じ取り、表し方の意図や特徴を捉え、自分なりに味わおうとしている。(行動観察、鑑賞カード)
まとめ	○ 学習活動を振り返り、感想を書く。	今後、表現活動に生かしていきたい染小紋のよさや特徴について触れるよう伝える。	

【本題材で最も重視した〈活動+要素〉を踏まえた学びの流れ】

活動

体験活動

+

要素

自分とよりよく関わる



模様的美しさや特徴を捉えるために、実物に触れ、染物職人と対話し、気付いたことを書いたり伝え合ったりする。

1 実物に触れる

体験活動



「こんなに細かい模様をどうやって切ったの。」「全部同じ大きさ、全部同じ形だ。すごい。」と、実物の型紙を丁寧に手に取り、手彫りの大変さを想像した。



丁寧に見る、近付けたり遠ざけたりして違う方向から見るなど、児童は様々な工夫をしながら鑑賞した。

実物や型紙を手に取り鑑賞する活動

2 鑑賞カードに記録する

(自分の思いを深める言語活動)



実物を手に取り感じたことや気付いたことについて鑑賞カードに記録した。

書くことにより、模様の細かさ、連続性、文字や絵が隠れていることなど、捉えた特徴を整理したり、それぞれについて自分がどう感じたかを確かめていた。

気付いたことや感じたことを記録する活動

3 気に入った作品を伝え合う

(表現のよさを共有する言語活動)



友達に説明する活動

「同じ形を連続して並べて、波の模様を作り出しているところがすてきだと思います。」など、気に入った作品について、その理由や気付いたことを友達に説明することで、自分が感じた染小紋の面白さや特徴を再確認した。また、友達の感じたよさを知ることによって、作品がもつ別の特徴やよさに気づき、自分の思いを深めた。

5 題材を通じた児童の変容

- ◇ 事前に型紙を使って版に表す経験をしていたため、児童は型紙や反物に興味をもち、進んで手に取ったり染物職人に質問したりするなど、主体的に鑑賞に取り組んでいた。
- ◇ 「遠くから見ると『細かい模様があるな』というくらいだけど、近付いて見たら小さな丸の連続でびっくりした。」など、見方を様々に変えながら特徴を見つけようとする姿が見られた。
- ◇ 気に入った作品のよさを伝え合うことで、新たな特徴やよさを見だし、もう一度作品を手に取って確かめる姿が見られた。
- ◇ 型紙について「一つ一つ切り取って作ったとは思えないね。」「職人の技だよね。」と感心していた。目に見えるよさだけでなく、作品を生み出す技術や、職人から職人に技術が受け継がれていくことのすばらしさを感じる姿が見られた。

6 まとめ

伝統的な作品を扱った鑑賞の指導では、実物に触れる場面を設定することが難しい。そのため、児童が自分の感覚を十分に働かせて表現のよさや特徴を捉えるという活動の目的が果たされない場合がある。

そこで、本事例では、児童が親しみをもてるように、染めの工程を模した、版に表す体験活動を設定した。このことにより、児童は鑑賞の対象に関心をもって関わることができた。

そして、実物に触れたり染物職人と対話したりする活動の時間を十分に確保し、気付いたことを記録し、気に入った作品のよさや特徴について友達と伝え合う言語活動を取り入れた。

このことにより、染小紋の模様に入れられた意図や特徴を見だし、自分の見方や感じ方で味わおうとする主体的な姿が引き出された。

今後、作品のよさや美しさを自分の思いをもって味わおうとする態度を育成していくために、体験活動で終わらせず、実物に触れることで気付いたことや感じたことを自分の言葉で表現する言語活動を充実させていくことが大切である。

小学校第4学年 道徳・特別活動

1 単元名「いじめをなくそう」

2 単元を通して身に付ける力

**いじめをなくすために
行動しようとする態度**

これまで

「いじめはいじめではない」「止めた方がいい」といった常識的な答えを探す傾向があった。

本研究では

いじめの問題に関して様々な立場で考え、議論し、自分がどう判断し、行動するかを考える活動を設定した。

3 指導計画（4時間扱い）

第1時 道徳【本時】
相互理解・寛容
＜いじめのない楽しいクラスにしよう＞
自分の周りでいじめが起こったとき、どのように行動するかを考える。

第2時 道徳
個性の伸長
＜その人らしさをさがそう＞
いじめを生まないためには、互いの「その人らしさ」を受け入れ、認め合うことが大切であることに気付く。

第3時 特別活動
＜コミュニケーション力を高めよう＞
言葉で伝えることに加え、相手の動きや表情をよく見て、相手が話したいことを知る大切さを学ぶ。

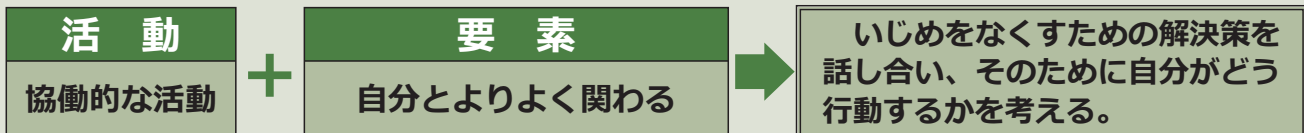
第4時 特別活動
＜気持ちのコントロールをしよう＞
いらいらするなど「嫌な気持ち」になったときの心の変化について知るとともに、具体的な対処方法を学ぶ。

4 本時（第1時）

【本時で身に付ける力】 自分の周りでいじめが起こったときの対応を考えることができる。

学習過程	学習活動	具体的な手だて	評価規準（評価方法）
導入	○ 課題を把握する。	教材※の一場面を見て感じたことを伝え合い、「いじめ」について考えていくことを確認する。	※教材について いじめを傍観してしまった14人の子供たちが、何もできなかったことについて、一人ずつ言い訳をしていく内容。 自分の周りでいじめが起こったとき、どのように行動するかを自分のこととして捉え、考えている。 (話し合い、ワークシート)
展開	◎ 教材を視聴し、話し合う。	いじめられている子を14人の子供たちが傍観している様子を描いた場面を提示する。	
	○ 周囲で見ている子の気持ちを考える。 ①	登場人物のいじめを傍観している15人目になったつもりで考えることを確認する。 見て見ぬふりはいけないことは分かっている、実際にできない難しさやつらさなど、葛藤する気持ちを疑似体験させる。 左右対称に板書し、揺れる気持ちに共感できるようにする。	
開	○ いじめられている子の気持ちを考える。	傍観者の心情を十分に考えた上で被害者の視点に転換することで、いじめられている子の痛みへの気付きを促す。	
	◎ 自分自身がどうするか話し合う。	2～3人のグループで考えを共有し、それぞれの発表を基にして議論につなげる。	
まとめ	○ 同じ場面に居合わせたとき、どのように行動したいかを考え、話し合う。 ②	議論の後、いじめをなくすためにどのように行動するか、自分の考えを書くように伝える。	
	○ 学習を振り返り、考えをまとめる。 ③	自分や友達、それぞれのよさを認め、受け入れることの大切さを印象付け、第2時につなげる。	

【本単元で最も重視した〈活動+要素〉を踏まえた学びの流れ】



1 教材に沿って考える (いろいろな立場で考える言語活動)



いじめを傍観している登場人物の葛藤する気持ちを考え、話し合う活動

いじめを傍観している登場人物の気持ちを考えた。「いじめられている子がかわいそう。」「でも、止めようとしたら自分がいじめられるかもしれない。怖い。」と葛藤する思いに共感しながら考え、話し合った。



教材ではセリフのない、いじめられている子の気持ちを考え、話し合う活動

視点を変えて、いじめられている子の気持ちを考えた。誰も助けてくれないつらさや悲しみを想像し、話し合う中で、「いじめは絶対にあってはならない。」「見ている人がやめさせなければ。」という問題意識が芽生えた。

2 課題解決に向けて考え、議論する (協働的な活動)



自分の周りでいじめが起きたときの対応について、全体で話し合う活動

自分の周りで同じようなことが起きたときにどうするか、各自が考え、議論した。「やめさせるのはとても勇気がいるね。」「うん。自分がいじめられたら、と思うと怖いもの。」と踏み出せない気持ちに互いに共感しながらも、「でも、早く助けなくちゃ。」「一人では怖いから何人かで言ってみようか。」といった具体的な解決策について話し合った。議論する中で、自分がどう行動するかについて考えを深めた。

3 自分の考えをまとめる (自己を振り返る言語活動)



「いじめを止めるのは難しい。でも、もしいじめを見たら勇気を出して止めたい。」「いじめはとても怖い。だからいじめのないクラスにしていきたい。」など、議論を通して考えたことを、自分の言葉でまとめていた。

5 単元を通した児童の変容

- ◇ 授業前に実施したアンケートでは、「いじめはいけない。」「止めなければならない。」という記述が目立った。しかし、道徳の授業を通して、いじめをやめさせたい気持ちはあっても行動に移すことができない、という一面を誰もがもっていることに気付き、自分の問題として捉え、考えようとする姿が変わっていった。
- ◇ コミュニケーションの方法や自己の感情をコントロールする方法を学ぶ特別活動の授業を通して、いじめをなくすためには、他者の立場や気持ちに寄り添うことや、自分の怒りや嫌な気持ちを自分自身で抑えていくことが大切だと気付いていった。
- ◇ 単元を通して、自分たちの学級だけでなく、他の学年・学級でいじめを見たらどう行動するか進んで考えるなど、いじめ問題の解決に向けて行動しようとする意欲の高まりが見られた。また、自分も加害者になる可能性もあることに気付き、いじめ問題をより深く受け止めようとする姿が見られた。

6 まとめ

これまででは、いじめ問題に関して、いじめはいけない、いじめを見たら止めるといった常識的な答えを探す傾向があり、自分の問題として捉えて考えることに課題があった。本事例では、いじめの場面を見たときに自分はどう行動するかを考え、議論する道徳の時間を設定した。様々な立場の人の気持ちに共感した上で、自分の問題として向き合い、考えを深めることができた。また、道徳と特別活動を組み合わせ、一つの単元として構成したことで、いじめについての理解が一層深まり、いじめをなくすために行動しようとする実践意欲や態度につながった。今後は、児童自らがいじめ問題について深く考え、いじめをなくすための行動を実践する態度を育むことが大切である。そのために、発達段階ごとに道徳や特別活動等を組み合わせることで単元を構成し、学校全体で取り組むことが有効である。

中学校第2学年 総合的な学習の時間

1 単元名「地域に貢献しよう」

2 単元を通して身に付ける力

地域に貢献しようとする態度

3 指導計画（7時間扱い）

第1時
<防災についての理解>
 地域の防災マップや東日本大震災の写真、「東京防災」等から、避難所の生活について調べ、考える。

第2・3時
<総合防災訓練の体験>
 地域の方と放水訓練や煙体験、応急処置訓練、災害用伝言ダイヤルを体験をする。

第4時【本時】
<避難所運営計画の作成>
保護者や地域の方と関わりながら、課題を解決して避難所運営計画を作成する。

第5・6・7時
<地域貢献の計画・実践>
 地域のために自分たちは何ができるか考え、計画し、実践する。

これまで
 地域の方から話を聞く、施設を訪問してボランティアを体験するなど、必ずしも双方向の関わりによる活動ではなかった。

本研究では
 互いの意見を尊重して取り入れながら、地域の方と共に解決策を考える活動を設定した。

4 本時の流れ（第4時）

【本時で身に付ける力】 地域の方と主体的に関わり、課題を解決しようとする態度

学習過程	学習活動	具体的な手だて	評価規準（評価方法）
導入	○ 本時の内容の確認	地域の方と相談して役割分担し、協力して考えていくことを確認する。	
展開	避難してきた方が安心できるよう避難所運営計画を作成しよう。		
	○ 保護者や地域の方と協力して課題を解決し避難所運営計画を作成する。 1	学校の各施設の特徴を踏まえ、避難してきた方の立場、すでに避難している方の立場など、様々な視点から考えることを確認する。	【主体的、創造的、協同的に取り組む態度】 避難所運営計画の作成について、保護者や地域の方と一緒に課題を解決しようとしている。 （観察）
	○ 他のグループの運営計画と比較する。 2	教室の活用方法や避難してきた方の状況を踏まえた部屋の利用ができているか具体的な視点を与える。	
○ 自分たちの運営計画を見直し、他のグループの考えを取り入れて修正する。 3	他のグループの運営計画のよいところを自分たちのグループの運営計画に取り入れ、修正するよう指示する。		
まとめ	○ 各グループで、避難所運営計画を作成した感想等を述べ合う。 ○ 全体で、避難所運営の課題を共有し、学習を振り返る。 （◆事後アンケート）	作成を通して気付いたことや、保護者や地域の方と一緒に考えて、感じたことを発表するよう促す。 本時の学習を生かして、今後自分は地域の一員として、どのように地域と関わっていけばよいのか、自分たちが地域のためにできることはないか、振返りの視点を示す。	

【本単元で最も重視した〈活動+要素〉を踏まえた学びの流れ】

活動
協働的な活動



要素
社会とよりよく関わる



地域の方と意見を交流し、様々な状況を想定して解決策を考える。

1 課題解決に向けて話し合う (協働的な活動)



地域の方と課題を解決して避難所運営計画を作成する活動

相談する中で、地域の方との距離が近くなっていき、生徒の考えに保護者や地域の方が知恵を付け加える形で、避難所運営計画が作られていった。生徒、地域、保護者といった立場を超えて、互いの意見を大切に取り入れながら、課題を解決した。

2 多様な考えと比較する (協働的な活動)



他のグループの運営計画と比較し、多様な考え方に触れる活動

他のグループの計画を見て、「自分たちでは気付かなかった点や細かい点まで目を向けていた。」「高齢者の方の部屋は分けて考える方法もあることが分かった。」など、多様な考えに触れ、自分たちの計画を振り返ったり、新たなアイデアを得たりした。

◆事後アンケート (考えを深める言語活動)

1 避難所運営計画の作成を振り返ってみましょう

(1) 地域の方と関わって、よかったこと、発見したことなど感じたことを書きましょう。

中堅世代の意見だけでなく、高齢者の方の意見もまじえることにより、よりよい意見が数々あがりやすかったです。

(2) 他の組の結果を見て、分かったこと、感じたことを書きましょう。

様々な意見を聞き取り、積極的に活用して、新しく、多岐に分類していき、思いました。

アールの様子の考えが、細かい所まで目を付けていて、すごいと思いました。

(3) 避難所運営計画の作成を行って、考えたこと、感じたことを書きましょう。

実際に災害にあつた、バックには、あつたはずと思いますが、しかし、今回のような体験を通じて、少しでも落ち着いて、対応できるようにすることが、地域の方の役にたつかなと思いました。

(4) 災害が起きたとき、あなたができると思うことはありますか、あれば書き込んでください。

自分でしっかり行くべき避難場所に行く、(11がして119→保健室)送られる人にどこに行けばいいか提案する。

不安に思っている人を元気づける。

3 よりよい計画に修正・見直しする (協働的な活動)



運営計画を見直してよりよいものに修正する活動

「避難所本部や掲示板の場所は、みんなが集まりやすい場所に。」「高齢の方は、日当たりのよい暖かい部屋に。」と避難してきた方の状況や気持ちを考えて、他のグループが考えた体育館や部屋の利用方法を取り入れ、よりよいものに修正した。

5 単元を通した生徒の変容

- ◆ 事前のアンケートでは、「地域のために何かやってみたいか。」という問いに対し、「是非やってみよう」と回答した生徒はいなかった。しかし、単元後のアンケートで全員が、「やってみよう」という肯定的な回答をした。
- ◆ また、災害時に自分が地域に関わる必要性についての質問では、「何をすべきか分からない。」「どのように関わればよいか分からない。」という回答から、「地域の方とコミュニケーションをとる大切さが分かった。自分も力になりたい。」という回答に変わっていった。
- ◆ 単元全体を通して、地域と関わることの大切さへの理解が深まり、地域のためにできることを実践することで、地域の一員としての自覚と役に立ちたいという社会貢献への意識が高まった。

6 まとめ

これまでも地域の方から話を聞いたり、地域における活動の手伝いをしたりするなどの取組は行われていたが、双方向による関わりまでに至らず、地域に貢献したいという態度に必ずしもつながっていないという現状があった。

本事例では、地域の方や保護者の方と避難所運営計画の作成に向けて、意見を出し合い、解決策について一緒に考える活動を取り入れた。生徒は、地域の方と協働する中で、地域の方の様々な立場を理解し、新たな視点をもつことができた。そして、地域の一員としての自覚を高め、地域貢献しようとする態度を育むことができた。

今後は、防災教育など社会の課題について、学校教育の中で地域と生徒が共に課題を解決していくという視点(開かれた教育課程)を取り入れて、協働する活動を位置付けていくことが必要である。

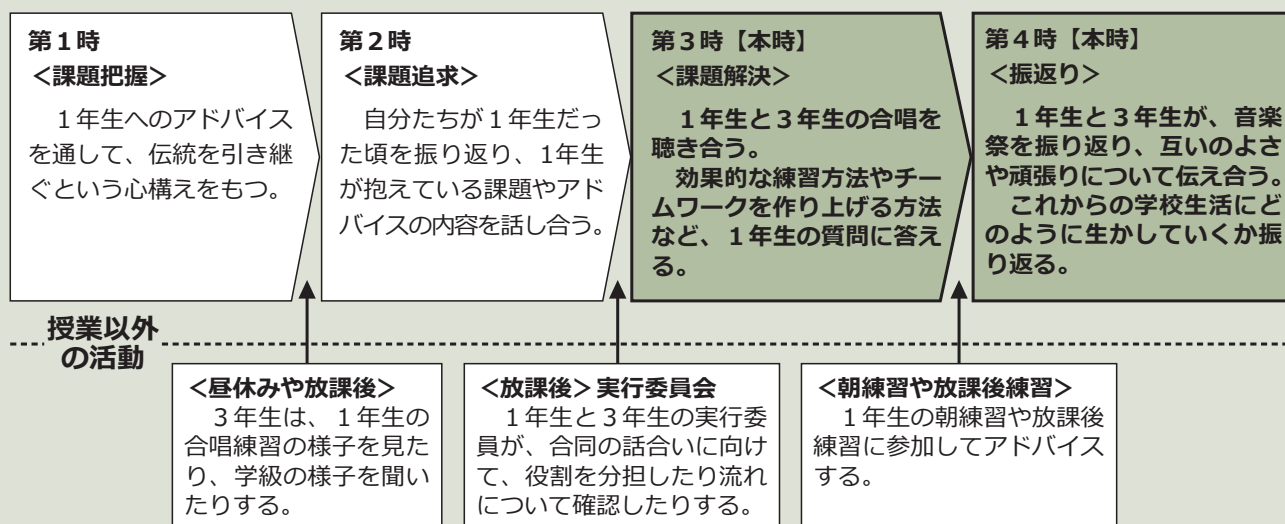
中学校第3学年 特別活動

1 単元名「音楽祭に取り組もう」

2 単元を通して身に付ける力

課題を解決に導こうとする態度

3 指導計画（4時間扱い）



これまで

学年や学級の代表など、一部の生徒がリーダーとなり、行事を進めていた。

本研究では

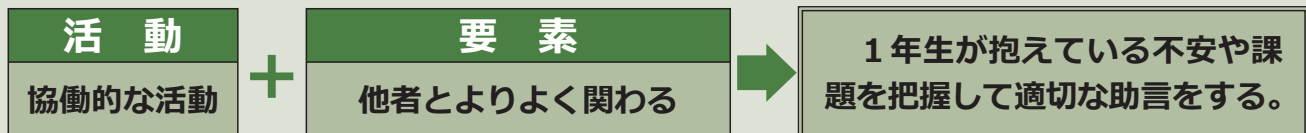
3年生全員がリーダーの役割を担い、1年生の課題を把握してアドバイスした。

4 本時の流れ（第3・4時）

【本時で身に付ける力】 リーダーシップを発揮し、1年生のチームワークを育てていこうとする態度

学習過程	学習活動	具体的な手だて	評価規準（評価方法）
第3時 展開	○ 本時の内容を確認する。	司会者の生徒に、活動の目的や流れを全体で確認するよう指示する。	【集団活動や生活への関心・意欲・態度】 交流活動が深まるよう、主体的に活動を進めようとしている。〔観察〕
	<p style="text-align: center;">音楽祭に向けての意欲を高めよう。</p> <p>○ 互いの合唱を聴き合い、よさや課題を把握する。 ①</p> <p>○ 3年生が1年生の質問に答えアドバイスし、音楽祭への心構え等について話し合う。 ② 男女別学年混合4人組 8分間の話し合い×3回</p> <p>○ 本時の活動を振り返り、発表する。</p>	<p>自分の経験を踏まえて、よさや課題を確認しながら聴くように、3年生に促す。</p> <p>3年生1人に対し、1年生2～3人がグループになり、対面させる。 「1年生が事前に準備した質問を丁寧に聞くこと」「これまでの経験を踏まえて積極的に答えること」を全体で確認する。</p> <p>1、3年生全体で話し合いの内容を共有し、本時の学習を今後の練習に生かして、取り組むように促す。</p>	
第4時 まとめ	○ 音楽祭を振り返り、互いの成果や感想を意見交換する。	第3時の学習やこれまでの練習、音楽祭の本番を振り返り、互いの成果や努力したことを伝え合わせる。	【集団活動や生活への関心・意欲・態度】 主体的に学級活動に関わるとともに、自己の生活の向上に生かそうとしている。（ワークシート）
	○ 音楽祭を振り返り、互いの成果を伝え合う。 ③	音楽祭を通して学んだことを、今後の学校生活にどのように生かすか振り返りの視点を示す。	

【本単元で最も重視した〈活動+要素〉を踏まえた学びの流れ】



1 よさや課題を把握する 協働的な活動



互いの合唱を聴き合うことを通して課題を把握する活動

「1年生の手本になりたい。」などの最上級生としての誇りと、合唱の技術への関心が高まった。

2 質問に答え アドバイスする 協働的な活動



1年生からの様々な質問に3年生が答える活動

自分が1年生だった頃を思い出しながら質問に答えた。

「ハーモニーはどのようにつくるのか。」「練習に積極的に取り組んでくれない人がいたらどうすればいいのか。」などの質問に、自分の経験を踏まえて答えた。

普段はリーダーシップをなかなか発揮できない生徒も、自信をもってアドバイスすることができた。

3 成果を振り返る 協働的な活動



学んだことや成長を振り返り、新たな課題を伝え合う活動

音楽祭で学んだことを振り返り、今後どのように生かしていくかについて伝え合った。

1年生は3年生の姿を目標に、3年生は卒業までの学校生活の充実を目標にしながら、共に成長していくことを確かめ合った。

5 単元を通じた生徒の変容

◇ 事前のアンケート調査で「最上級生として後輩と積極的に関わっている。」と回答した生徒は、全体の約20%弱であった。

しかし、事後の調査では、同様の質問に対し、ほぼ全員が肯定的な回答をしていた。また、「1年生へのアドバイスや、褒めたり励ましたりすることは難しかったが、1年生が頑張ってくれて嬉しい。」という感想をもつ生徒が多くいた。

◇ 第3時では、初めのうち1年生と積極的に関われない生徒もいたが、1年生から次々と投げかけられる質問に対して懸命に答えるうちに、自信が引き出されていった。1年生の悩みに寄り添い、当時の失敗談を踏まえながら、適切にアドバイスすることができた。

◇ 全員がリーダーとしての役割をもったことで、全員が同じ立場で、1年生の課題を解決していこうという目的が明確になり、リーダーシップがより発揮されていった。

◇ 本単元を通して、より好ましい人間関係を深めるとともに、学校生活を充実させていきたいという態度も育まれた。

6 まとめ

これまで、音楽祭では、特定の生徒がパートリーダー等として取組を推進する状況が多く見られた。また、互いの学年の合唱を聴き合う異学年集団による交流活動も行われていた。

本事例では、3年生全員にリーダーの役割を与え、1年生と共に考え、関わりながら一つの行事に取り組みさせることで、学年全員のリーダーシップの育成を目指した。

このことにより、生徒は最上級生としての自覚が高まり、自信をもって1年生と関わるができるようになった。

上級生が下級生と関わる異学年集団による交流は、リーダーシップを育成しやすい有効な活動である。その中で、リーダーシップを培うためには、生徒一人一人に指導的役割をもたせることが重要である。

今後、一部の生徒だけではなく、より多くの生徒がリーダーとして活躍する場を設定していくことが求められる。

中学校生徒会及びプロジェクトチーム 特別活動

- 1 単元名「校区のいじめをなくすために」
- 2 単元を通して身に付ける力

校区のいじめを解決しようとする
自主的・実践的な態度

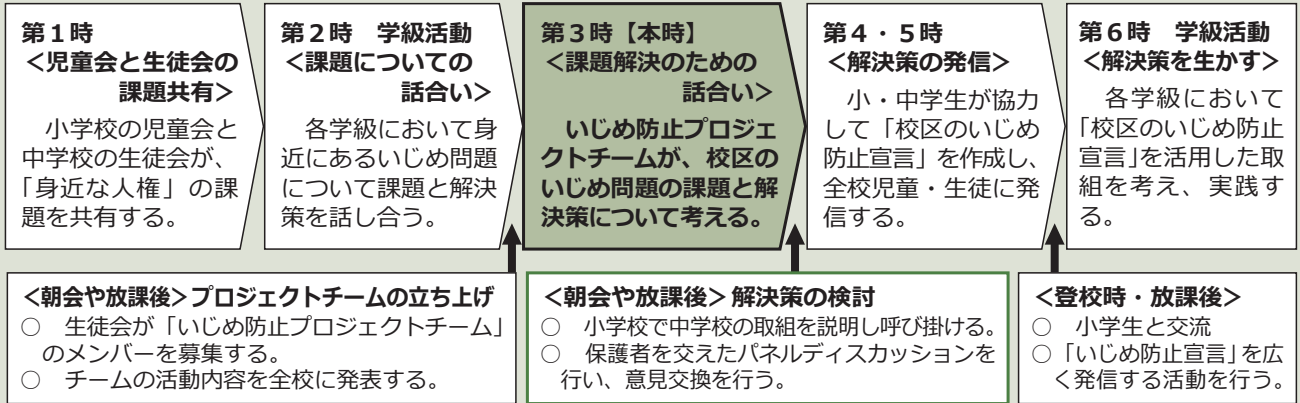
これまで

いじめ問題の解決に向けた活動は、教師が中心となって計画し、生徒が実践していた。

本研究では

生徒が校区のいじめ問題について課題意識をもち、主体的に解決策を計画し、実践した。

3 指導計画（6時間扱い）



4 本時（第3時）

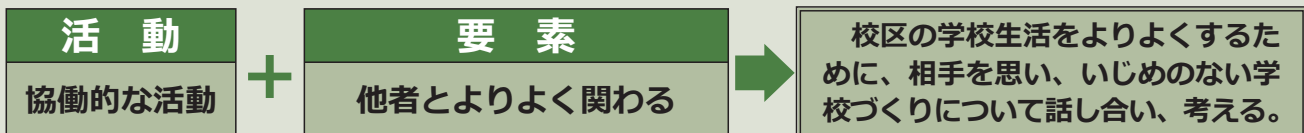
【本時で身に付ける力】 よりよい校区にするために、いじめの解決策を考え、実行しようとする態度

学習過程	学習活動	具体的な手だて	評価規準（評価方法）
導入	○ 校区のいじめについて問題を確認する。	本時に至るまでの活動を振り返り、本時の学習に見通しをもたせる。	
展開	<p style="text-align: center; background-color: #e0f2f1; padding: 5px;">よりよい校区を目指して、いじめの未然防止の方法を考えよう。</p> <p>○ 校区のいじめの問題について課題を出し合い、考えを共有する。</p> <p>・ いじめている立場 ・ いじめられている立場 ・ 見て見ぬふりをする立場</p> <p>○ 校区のいじめの解決策を考える。</p> <p>○ 各グループの考えを共有して具体的な実践方法を話し合う。</p>	<p>異学年混合の4人グループになり、事前にまとめておいた自分の考えを伝え合い、他者の意見や考えを聞き、共有することを全体で確認する。</p> <p>1 全員が三つのテーマについて意見を交換させ、多様な視点からいじめについて考えるよう指示する。</p> <p>様々な意見からよりよい考えにまとめさせ、校区のいじめを未然に防ぐ方策を考えるよう指示する。考えた解決策にどのように取り組むかという視点も踏まえて計画するよう助言する。</p> <p>2 三つのテーマから考えた解決策を伝え合い、よりよい校区づくりのために、ふさわしい取組になるよう方向付けする。</p>	<p>【集団活動や生活への関心・意欲・態度】</p> <p>いじめのない校区にするために意欲的に考え、取り組んでいこうとしている。（観察、ワークシート）</p>
まとめ	○ 活動を振り返り、今後の活動について確認する。	多様な視点からいじめについて考えられた解決策を価値付け、今後協力してどのように取り組んでいくか、振り返りの視点を示す。	

朝会・放課後

- 中学生が小学生に、いじめ防止の取組について呼び掛ける。
- 保護者を交えたパネルディスカッションを行い、意見交換をする。

【本単元で最も重視した〈活動+要素〉を踏まえた学びの流れ】



1 課題を共有し、解決策を見いだす

協働的な活動



自分の意見を伝えたり互いの考えを聞いたりして課題に迫り解決策を見いだす活動

いじめる立場、いじめられている立場、見て見ぬふりをする立場の思いについて、学年を超えて話し合った。その中で「いじめてよい理由などない。」「許されない。」「いじめられている立場を守らなければ。」と解決策に迫っていった。
いじめをなくすために学校全体で何をすべきか、アイデアを出し合った。

2 実践方法について話し合う

協働的な活動



各グループで考えた解決策を共有し、実践する方法について話し合う活動

各グループで出された解決策を全体で共有し、「ハートボックス活動」や「いじめ防止マスコットキャラクターの作成」などの取組に絞り込んだ。その際、校区のいじめをなくすためには、中学校の取組を小学校にも発信していく必要があるということが確認された。

朝会・放課後

小学生に中学校の取組を紹介する



小学校の全校朝会で中学生の取組を紹介する活動

「私たちは、校区のいじめをなくすためのチームの一員です。」と自己紹介し、「ハートボックス活動（悩み相談箱）」や「いじめ防止マスコットキャラクターの普及活動」について説明をした。

自分たちの取組に自信をもっている中学生の話も小学生も熱心に聞いていた。

保護者を交えてパネルディスカッションする



地域や保護者の方と意見交換する活動

生徒からは「普段からいろいろな人と関わり、困っている友達の变化に気付けるようにしたい。」という意見が出された。

保護者からは「自分の問題として、いじめについて考えてほしい。」、地域からは「みんなで解決していくことを大切にしてほしい。」という提案がなされた。

5 単元を通した生徒の変容

- ◇ 年度当初の小学校児童会と中学校生徒会の交流において、いじめや友達同士のトラブルについて問題提起がなされた。その後、各校における学級での話し合いや生徒会の働き掛けにより、「いじめ防止プロジェクトチーム」が発足し、「いじめのない校区にしたい。」という気持ちが高まり広がっていった。
- ◇ 自分たちの身近にあるいじめ問題について、生徒同士の意見交換や保護者、地域の人たちとのディスカッションなど、様々な視点から意見を聞き、考えを深めていくことで、校区のいじめ防止につながる取組を主体的に考え、計画し実践することができた。
- ◇ また、校区の小学校に発信したいじめ防止の活動に、周囲から賛同や応援を得たことで、「よりよい校区にしたい。」という気持ちが強固になり、他の児童・生徒に呼び掛ける姿につながっていった。

6 まとめ

これまでいじめの問題に関する取組は、標語の募集や宣言の作成などの工夫が見られているが、学校の実態に合わせたものを教師が提案し、生徒が実践する活動が多く見られた。

本事例では、生徒たち自身が校区のいじめ問題について考え、解決策を計画し実践することを通して、よりよい校区にしたいという態度を育んだ。

生徒たちは、いじめの解決策を考えていく中で、中学校だけでなく、校区全体で解決していく必要があることに気付き、小・中学生が協力して取り組める活動を計画した。

いじめ問題の解決には、生徒自身がいじめと向き合い、課題を把握して解決策を計画することが求められる。自分たちの問題として解決していかうとする態度を育てていくことが重要である。

研究のまとめ

本研究では、「資質・能力」の育成を図るために、子供が「どのような力を身に付けるか」を明確にしたPDCAサイクルの推進と、学びの質や深まりを促すための活動の工夫について、事例開発を通して効果を検証した。

本研究を通して、大きく次の二点が明らかになった。

I 四つの効果的な指導の工夫

12の事例開発・検証を通して、「資質・能力」の育成を図るためには、次の四つの指導の工夫が効果的であることが明らかになった。

- 1 単元（題材）全体を通した「資質・能力」の育成
- 2 子供が活動する時間の確保
- 3 学びの質や深まりを促すための活動の工夫
- 4 「個」→「集団」→「個」の学習過程

1 単元（題材）全体を通した「資質・能力」の育成

本研究では、社会的背景や子供の実態から、「思考力・判断力・表現力等」及び「学びに向かう力、人間性等」の育成を見据えて、単元（題材）で身に付ける力を設定した。

例えば、中学校第2学年総合的な学習の時間「地域に貢献しよう」は、①防災についての理解、②総合防災訓練の体験、③避難所運営計画の作成、④地域貢献の計画・実践、という四つの小単元で構成した。③避難所運営計画の作成では、生徒が地域の方と共に課題解決に取り組む活動を通して、自分が地域のために力を発揮できることや地域の一員としての自覚を高めていった。そして、④地域貢献の計画・実践では、この自覚をもって地域清掃や植栽に主体的に取り組み、地域のために役立とうとする態度が形成されていった。

このように子供たちは、一単位時間のみならず、単元全体を通して、地域に貢献しようとする態度を身に付けていった。

こうしたことから、「資質・能力」といった大きな力は、単元（題材）全体を通してこそ育成が図られるのであり、そのためには単元（題材）全体を通してPDCAサイクルを推進することが必要であることが明らかになった。

2 子供が活動する時間の確保

本研究では、子供が「資質・能力」を身に付けるためには、子供の学びに着目することが必要であるという考えの下、PDCAサイクルのD「子供が『どのように学ぶか』」を重視し、子供の学びを大切に授業づくりに取り組んだ。

例えば、小学校第5学年図画工作「染小紋のひみつ」では、教師の指示や教授する内容を精選したり、活動の場を工夫したりするなど、児童自身が活動する時間を十分に確保した。その結果、鑑賞の場面では、教師の指示がなくても反物や型紙の実物を手に取ったり、自主的に染物職人（ゲストティーチャー）に質問したり、気付いたことを伝え合ったりするなど、鑑賞の対象に積極的に関わり、特徴を捉えようとする児童の姿が見られた。

このように、「資質・能力」の育成のためには、子供が活動する時間を十分に確保することが効果的であることが明らかになった。

3 学びの質や深まりを促すための活動の工夫

子供が力を身に付けるためには、活動する時間を確保するだけでなく、子供が主体的に学習に取り組む「学びの質」や、このような学びを通して子供が力を身に付けたり、身に付けた力を活用したり、新たな課題を見いだしたりする「学びの深まり」を促すために、活動を工夫することが必要である。

(1) 活動の目的の明確化

単に活動を設定するだけでは、子供が「活動を通して『どのような力を身に付けるか』『何のための活動か』」が分からず、主体的な学びを促すことができない。そのため本研究では、「活動」に「資質・能力」を構成する要素を組み合わせることで、活動の目的を明確にした。

例えば、中学校第1学年社会「世界各地の人々の生活と環境」では、「協働的な活動」に「物事を多様な観点から考察する」という要素を組み合わせ、活動の目的を明確にした。その結果、担当する観点で各自が責任をもって調べた後、追究してきたことをグループで伝え合い、その中から必要なものを組み合わせながら協働して考察を導き出す姿が見られた。

このことから、子供の主体的な学びを促すためには、活動の目的を明確にする工夫が効果的であることが明らかになった。

(2) 言語活動の効果的な活用

事例開発を通して、「体験活動」及び「協働的な活動」は、「言語活動」と密接な関連があることが分かった。

例えば、小学校第2学年生活科「おもてなし名人になろう」では、茶道の講師（ゲストティーチャー）から「おもてなし」を受ける「体験活動」の後に、体験を通して気付いたことを伝え合うという「言語活動」を設定した。この学習の流れにより、「体験活動」での気付きを共有し、「おもてなし」の意味について理解を深めることができた。

また、小学校第5学年算数「分数のたし算とひき算」では、一人一人が「言語活動」で自分の考えを明確にし、「協働的な活動」で自分の考えと友達のことを比較しながら、よりよい方法を見いだしていった。このように、「協働的な活動」の前に「言語活動」を設定したことにより、一人一人が話し合いに積極的に参加でき、複数の視点をもって考え、課題解決に向かう学びが実現した。

これらのことから、学習の理解を確かにしたり、自分の考えを深め広げるためには、「体験活動」や「協働的な活動」の前後に「言語活動」を効果的に取り入れることが有効であることが明らかになった。

4 「個」→「集団」→「個」の学習過程

現在、学習過程に学び合いを取り入れることは、当たり前となっている。しかし、学び合いで終わることなく、再び個の学びに戻すことが大切であることが明らかになった。

例えば、中学校第2学年外国語「助動詞」では、まず、適切と考えられる表現について自分なりに考え、次にグループ協議でアドバイスを得たり、グループで考えた説明文を全体で伝え合ったりして、最後に再び自分で適切な表現について考えるという、「個」→「集団」→「個」の学習過程を導入した。これにより、単なる助動詞の理解だけではなく、助動詞を適切な場面で効果的に活用する力を高めることができた。また、算数の事例では、単元を通して、授業の最後に「学んだことをどのような場面で活用したいか」について振り返る場面を設定し、次の学びにつなげることができた。

このように、学び合いを取り入れる学習過程においては、「個」の学び、集団での学びの後、再び個の学びに戻す、「個」→「集団」→「個」という学習過程が効果的であることが明らかになった。

Ⅱ 本研究とアクティブ・ラーニングとの関連

学習指導要領の改訂を目前に控え、改訂の柱の一つである、アクティブ・ラーニング（主体的・協働的な学び）が注目されている。アクティブ・ラーニングを促す授業改善の視点は、「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」である。これら三つの授業改善の視点を、東京都多摩教育事務所では、学びの過程として次のように捉えている。

アクティブ・ラーニングを促す授業改善の視点

● 主体的な学び

子供たちが見通しをもって粘り強く取り組み、自らの学習活動を振り返って次につなげる主体的な学びの過程

● 対話的な学び

他者との協働や外界の情報との相互作用を通じて、自らの考えを広げ深める、対話的な学びの過程

● 深い学び

習得・活用・探究という学習プロセスの中で、問題発見・解決を念頭に置いた深い学びの過程

平成27年度 所報たまじむ 第2号（東京都多摩教育事務所）より

本研究のまとめに示した四つの効果的な指導の工夫とこれらの視点とを照らし合わせると、本研究とアクティブ・ラーニングは深く関連していることが分かる。例えば、

本研究の【単元（題材）全体を通した「資質・能力」の育成】は、「主体的な学び」に、

【子供が活動する時間の確保】は、「主体的な学び」や「深い学び」に、

【学びの質や深まりを促すための活動の工夫】は、「対話的な学び」や「深い学び」に、

【「個」→「集団」→「個」の学習過程】は、「深い学び」に

特に対応しており、密接な関連をもっている。

本研究で明らかになった四つの効果的な指導の工夫

- 1 単元（題材）全体を通した「資質・能力」の育成
- 2 子供が活動する時間の確保
- 3 学びの質や深まりを促すための活動の工夫
- 4 「個」→「集団」→「個」の学習過程



アクティブ・ラーニングを促す授業改善の視点

- 主体的な学び
- 対話的な学び
- 深い学び

今後、多摩地区の小・中学校をはじめとする多くの学校において、アクティブ・ラーニングをテーマにした校内研究が推進され、アクティブ・ラーニングの視点で教育課程の見直し・改善が図られていくことが予想される。子供たち一人一人に「資質・能力」の育成を図るため、本研究の成果が広く活用されることを期待する。

委員名簿

委員長 有馬 守一 (狛江市教育委員会教育長)

副委員長 山口 茂 (青梅市教育委員会指導室長)

委員

学力向上部会

部会長 藏 重 佳 治 (国立市立国立第四小学校長)
副部会長 木 下 英 典 (おおさわ学園三鷹市立第七中学校副校長)
委員 山 本 美 紀 (町田市立南第一小学校主幹教諭)
委員 高 橋 達 也 (稲城市立稲城第六小学校主幹教諭)
委員 菅 野 有 里 (東大和市第六小学校主幹教諭)
委員 加 藤 真由子 (調布市立第五中学校主任教諭)
委員 飯 干 正 己 (府中市立府中第五中学校教諭)
委員 川 島 征 也 (立川市立立川第五中学校教諭)

健全育成部会

部会長 千 葉 正 法 (多摩市立東愛宕中学校長)
副部会長 小 林 宏 (東村山市立回田小学校副校長)
委員 古 瀬 義 房 (日の出町立大久野小学校主幹教諭)
委員 小 影 俊 一 (小平市立小平第十小学校主幹教諭)
委員 池 田 頼 太 (国立市立国立第三小学校主幹教諭)
委員 戸 田 美世子 (狛江市立狛江第三中学校主任教諭)
委員 吉 川 滋 之 (東村山市立東村山第五中学校主任教諭)
委員 宇 田 賢 史 (東三鷹学園三鷹市立第六中学校教諭)
(協力) 後 藤 保 紀 (小平市立小平第十小学校主任教諭)

事務局 東京都多摩教育事務所

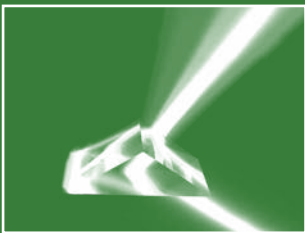
所 長	黒 田 則 明	指導主事(併任)	大 津 嘉 則
指 導 課 長	宇 田 剛	指導主事(併任)	田 中 暁
統括指導主事	浅 野 あい子	指導主事(併任)	渡 邊 啓 介
指 導 主 事	吉 岡 琢 真	教育専門員	村 井 恒
指 導 主 事	大久保 順 子	教育専門員	飯 田 薫
指 導 主 事	濱 田 昌 也	教育専門員	菊 池 春 海
指 導 主 事	堀 合 葉 子	学校教育指導専門員	對 馬 伸 一 郎
		学校教育指導専門員	蒔 田 誠

東京都多摩地区教育推進委員会
第21次計画 (通算第42次) 報告書

平成28年 2月
編集・発行
〒190-0022 東京都立川市錦町 4-6-3
TEL 042-524-7222 FAX 042-528-0985
印刷 システム印刷株式会社

登録番号27(4)

この報告書は、東京都多摩教育事務所のWebページに掲載しています。御活用ください。
URL <http://www.tamajimu.metro.tokyo.jp/>



【表紙について】

表紙のプリズムの光は、教師が「何を教えるか」から子供が「どのように学ぶか」へ視点を転換した「本研究のイメージ」を表しています。